遊戯王ＧＸ　強制転生日記

蒼影

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遊戯王ＧＸ　強制転生日記

【Ｎコード】
Ｎ９３６０Ｐ

【作者名】
蒼影

【あらすじ】
神と名乗るジジィによって転生させられた主人公。
転生先はＧＸの世界。
大量のカードと大量の精霊で送る（強制的な）転生の日々が始まった。

ターン０　『これって転生ってやつ？』（前書き）

リリカルが終わってないのに書きました。

リリカルが優先なのでこちらの更新は遅めです。

それではどうぞ！

５／２９一部表現修正

ターン0　『これって転生ってやつ？』

突然な質問だが、皆は『転生』と言うのは知っているだろうか？
二次小説なんかでよくある突然神と名乗る人物が現れて、「突然ですが、あなたは死にました。」とか言ってきてアニメやゲームの世界へ送るあの転生だ。
この俺、峰岸春樹（みねぎしはるき）今まさにその転生を体験したばっかりなのだ。
現在俺は新しい両親に見られながらスーパー赤ちゃんタイムの真っ最中なのだ。

（まさか……あのジジィの話が本当だったとは…）

・・・約2時間とちょっと前・・・

「突然ですが、あなたは死にました。」

「……は？」

これが俺とジジィの最初の出会いだった

「……悪い、爺さん。どうやら俺の耳はおかしくなったらしい…今「死んだ」って聞こえたんだが？もう一度言ってくれるか？」

「その年で耳が悪いのか？ならもう一度言おう…お前は死んだ。」

「うぇぇぇぇぇい！！！！」

ゴシャア！！！

「ツバクカンサルマ！！」

今ジジィが意味のわからない言葉を吐きながら吹っ飛んでいった

なぜなら、俺が放った某仮面なライダーに引けを取らないとび蹴りがジジィの顔面を抉ったからだ。

「いきなり何をするんじゃあ！？」

「お前が訳の分からないことを言うからだろうが！なんだ死んだって！？死ね！お前が死ね！いっそ砕け散れ！」

「顔面に蹴り入れた上に砕け散れは無いんじゃないかのう？…とり

あえず落ち着いてくれんかのう……今説明するから」

「おう、納得いく説明を頼むぞ。じゃなきゃ今度は17分割してやる。」

俺はどこからかナイフを取り出してジジィに言う

「リョウカイデス」

〜〜説明中…しばらくお待ちください〜〜

「つまり、お前が担当をしていた見習いの神様がミスって俺が死んでしまったと？で、生き返らせることはできないから、そのお詫びに違う世界へ転生させてやろうというわけだな？」

「まぁ、そんな感じじゃな…ちなみに転生させる世界は決まっておるぞ。お前の好きな『遊戯王ＧＸ』の世界じゃ！嬉しかろう？」

「嬉しいわけあるか！？やっぱり17分割してやろうか！クソジジィ！！」

「フォ！？なぜ！？だからどこから出したんじゃそのナイフ！？」

ジジィがニコニコしながら俺がここに入る経緯を話しているのが何とも腹立たしいので俺はナイフを持って般若の如くジジィに歩み寄る

「…で？俺にはなんか特典あんのか？」

「は？特典？」

「こういう場合なんか特典あんだろ！？」

「遊戯王の世界で特典なんか付けてどうするんじゃ？チートな身体能力持ってリアリストにでもなるのか？」

※リアリストとはデュエルで物事を解決する遊戯王の世界であえて腕力や暴力で物事を解決する人の事だよ♪

「そういやそうか……じゃあカードくれ！大量のカード！」

「まぁ、あの世界ではカードは多くても困らんからのう…あい分かった、要求の大量のカードはお主がデュエルアカデミアに入学する1週間前に送っといてやろう」

「よろしく。」

「あと、お前には大量の精霊がつくと思うから覚悟しておくんじゃのう…」

「は？…おいちょっと待て、それはどういうこと……」

俺が言い終わる前に俺の足元の床が無くなった

「だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！」

「頑張るんじゃぞ～」

ジジィが白いハンカチをヒラヒラ振っているのがチラッと見え殺意が沸いた

ぜってぇ３枚におろす！！

・・・回想終わって現在・・・

…思い出したら腹立ってきた…しかし転生って言うだけあるな、ま

さか赤ん坊からやり直しとは……

両親と思われる男女がしきりに俺の名前を呼んでいる

はぁ…遊戯王か…嬉しいような悲しいような…

こうして俺の第2の人生が（強制的に）始まった。

ターン０　『これって転生ってやつ？』（後書き）

いかがだったでしょうか？

感想、ご指摘お待ちしています。

ターン1　『これが入学試験ってやつ？』（前書き）

連続投稿になるのかな？さすがにオープニングだけじゃあれだし…

それではどうぞ！

ターン1　『これが入学試験ってやつ？』

「はぁ～今日か…デュエルアカデミアの実技試験…」

私服を着て、首に青のヘッドフォンをかけている俺……峰岸春樹改め、如月（きさらぎ）　凰雅（おうが）

俺が自分の名前を聞いて思ったことを素直に言うと……何この厨二病な名前？

凰雅ってなに？なんでそんな名前付けたの！？

見た目とギャップがありすぎて似合わねぇよ！？

ちなみに俺の見た目ははっきり言ってしまえば某異常（アブノーマル）な生徒会長のマンガに出てくるあの……球磨川禊まんまである。

どういうわけかいくら筋トレしても体形が変わらなかった…筋肉はついてるようだが…

ただ、その球磨川禊とは決定的に違う部分がある。それは…

『ア』　『ホ』　『毛』　である！

そう、どこかの腹ペコ王のように頭頂部の辺りにピコピコとアホ毛があるのである。

ただ、それほど目立つわけではない、長さもせいぜい1～2ｃｍくらいなのだが

容姿のもとを知ってる俺にしてみればものすごく違和感があるのだ。

「はぁ…鬱だ…死の〈いつまで現実逃避しているんだい？凰雅。〉……現実逃避の原因の2割はお前のせいだと自覚してくれ…ユベル（・・・）」

俺の左斜め後ろから男なのか女なのかよく分からない体の人物が俺に声をかけてくる

一般人の違いは上に上げた通り男なのか女なのかよく分からない体つきに皮膚？の色が白？と黒？に2色に分かれている。１０人中１０人はこいつを普通の人間とは言わない。

そう、こいつの名はユベル。この世界では遊戯十代の精霊であり、この世界のヤンデレキャラと言われた奴だ。

なぜかこいつ『等』が1週間前、ジジィが寄越したカードから出てきた。

あのジジィ絶対殺す！

〈神様に殺意を燃やすのはいいけど、神様だって言ってじゃないか『おまえには大量の精霊がつくと思うから覚悟しておくんじゃ…』ってさ……〉

〈だからと言ってもお前が来るか？お前は十代の精霊だろう？〉

今俺とユベルは某魔砲少女に出てくる念話もどきで会話している

〈遊戯十代の僕と僕は同じであって違う存在だよ。実際遊戯十代の僕はヤンデレ…だっけ？それが悪化中〉

〈うわぁ…想像したくねぇ…〉

〈だから、凰雅も僕を受け入れないと僕もヤンデレになっちゃうよ？〉

〈さらっと恐ろしいこと言うな！〉

〈マスタ…もうすぐ呼ばれる……〉

〈ほらほら、凰雅！早く行こうよ！〉

〈マナ！凰雅殿もマスターなのだからちゃんと敬語をだな……〉

「はぁ～～～～～～」

俺の右斜め後ろから3つの念話が聞こえる

1人目は水色の髪にローブに杖を持って「私は魔法使いです」って主張する格好の少女…

2人目は1人目の少女より背が高くピンクと青の服？法衣？を着ていて「私は魔女っ娘です！」と言い張っているような格好の少女

3人目は2人目と似たような紫色の服？法衣？を着た男性

はい。分かる人は分かりますね。上から水霊使いエリア、ブラック・マジシャン・ガール、ブラックマジシャンです。本当に（ｒｙ

こいつらもユベルと同様送られてきたカードから出てきた。

〈って言うかマナとマハードは遊戯の精霊だろう？ユベルにも言ったがなんで俺のところに居るんだ？〉

そう、ぶっちゃけこのブラマジ師弟はあの決闘王…武藤遊戯の精霊なのだ。なのに…なぜか俺のところに居る

〈マスターのところと今、凰雅のところに居る私達はおんなじ存在だよ。分身みたいなものかな？ニンニン♪〉

〈魔女っ娘がニンニンって……違和感バリバリだな……それとマハード。マナには言っても聞かない。諦めろ。〉

〈しかし、凰雅殿……〉

〈別に気にしてないから…ついでに俺は出会って３０分で色々諦めた〉

〈……分かりました。マナ、凰雅殿にちゃんと礼を言うのだぞ。〉

〈は～～い！ありがとう！凰雅！〉

〈精霊４人って疲れるな……〉

クイクイ……

〈ん？どうしたエリア？〉

突然エリアが俺の服を引っ張ってきた

〈マスタ…次マスターの番……〉

見てみると俺の前の生徒のデュエルは終わっていた

〈分かった…ありがとう、エリア。〉

〈ん……〉

何だろう…エリアは口数が少ないけどなんか癒される……

《受験番号8番。如月凰雅さん、実技試験の準備が整いましたので、決闘場に上がってください。》

「俺の番か…デッキは…あぁ…これか…」

〈たしかそれは凰雅が3日前に組んだデッキだね〉

〈え？あのデッキ！？〉

〈……相手が気の毒…〉

そう今デュエルディスクにセットされているデッキはジジィからもらったカードをフルに使って組んだデッキだ

ジジィの奴…気前のいいことに俺が生きていた時のＯＣＧ最新カード＋ゲームの中のゲームオリジナルカード全種って…この時だけジジィに少し感謝した。

しかも全部９枚ずつ…

当然というか何と言うか…シンクロにダークシンクロ…さらにゲームオリジナルもあった。それに三幻神とか三邪神とか三幻魔とか地縛神とか機皇帝とか…ヤベェ…星界の三極神もあったよ…ヤベェよこれ……

…他にも色々おまけはあったが…精霊とか、精霊とか、精霊とか、精霊とか！！

考えているうちに場に上がっていたようだ

相手は普通？のアカデミアの教員だった。

なぜかアカデミアの一般の教師はサングラスをしている……なぜ？

「君が受験番号８番だね？」

「はい。受験番号８番、如月凰雅です。」

「如月君……君のそのデュエルディスクは？」

「これですか？別に検査で問題はありませんでしたよ？」

「そうか…ならいいんだ。」

俺のデュエルディスクは他の人のディスクとは違う。

ぶっちゃけ俺のディスクは蟹……じゃない不動遊星のディスクだ

もちろん、あのジジィがカードと一緒に送ってきた。

オートシャッフル、カードサーチ機能まで付いている……便利すぎる。さすが神様ぱぅわぁ……

「では……」

「「決闘（デュエル）！！」」

試験官　ＬＰ４０００

凰雅　ＬＰ４０００

「先行は私が貰う。私のターン、ドロー！」

前から思っていたんだが先攻、後攻が早い者勝ちってよく口論にならないな……

「私は『ゴブリン突撃部隊』を召喚！」

ゴブリン突撃部隊　ＡＴＫ２３００

「さらにカードを１枚伏せて、ターンエンド。」

試験官　ＬＰ４０００　手札４

モンスター　ゴブリン突撃部隊

魔法・罠　伏せ１枚

「俺のターン、ドロー。……何だこれ？」

「どうした？手札事故か？」

「いえ、何でもありません……」

事故って言うよりこれは……

「俺はフィールド魔法、『歯車街（ギア・タウン）』を発動、さらにカードを2枚伏せ、『大嵐』を発動！お互いの魔法・罠カードをすべて破壊！」

「なに！？それでは君のカードも！」

フィールドに突風が吹き荒れフィールドのカードが吹き飛ばされていく

…悪いなクロノス…二番煎じになってしまうな……

「歯車街が破壊されたことでデッキから『古代の機械巨竜（アンティーク・ギアガジェルドラゴン）』を特殊召喚！」

古代の機械巨竜　ＡＴＫ３０００

「攻撃力３０００だと！？」

「さらに墓地の『黄金の邪神像』の効果発動！セットされているこのカードがカードの効果で破壊された時、自分フィールドに邪神像トークンを1体特殊召喚する。伏せていた邪神像は2枚……よって2体の邪神トークンが特殊召喚される！」

邪神トークン×2

「一気に3体のモンスターを……」

「さらに2体の邪神トークンを生贄に、『古代の機械巨人（アンティーク・ギアゴーレム）』を召喚！」

古代の機械巨人　ＡＴＫ３０００

「攻撃力３０００が2体……」

試験官は顔を青くしている…別にこれぐらい普通じゃねぇ？

「さらに速攻魔法『リミッター解除』を発動。俺の場の機械族モンスターはこのターンのエンドフェイズまで攻撃力は2倍になる。ただし、エンドフェイズにこの効果を受けたモンスターは自壊する。」

古代の機械巨竜　ＡＴＫ３０００→６０００
古代の機械巨人　ＡＴＫ３０００→６０００

「あ…あぁ……」

「バトル！『古代の機械巨人』で『ゴブリン突撃部隊』を攻撃！続けて『古代の機械巨竜』でダイレクトアタック！」

「うわぁぁぁぁぁぁ！！」

試験官　ＬＰ４０００－３７００＝３００－６０００＝－５７００

はい。ワンターンキル成功……

と言うか半分ワンキルの為のデッキなんだがな……

「ありがとうございました。」

俺はさっさとその場を後にした

・・・・・・・
・・・
・

俺がさっきまでいた場所に戻ると

「君、さっきはすごかったな。」

突然俺より少し背の高い青年に声をかけられた……こいつは三沢大地か…後々『空気男（エアーマン）』とか言われる……

「君は確か…受験番号1番の……」

「あぁ、三沢大地だ。君は確か…」

「如月凰雅だ。如月でも凰雅でも好きに呼んでくれ。俺もお前の事を好きに呼ぶ。」

「じゃあ如月と呼ばせてもらう…しかしワンターンキルとは…思い切ったことをするな」

「別に…そう言うデッキを組んだだけだ……見るか？」

「いいのかい？君のデッキだろう？」

「構わない。今回の試験のためだけに組んだデッキだ。クセは強いがよく回ってくれた。この後崩してもう少しちゃんとしたデッキにするつもりだし」

「そ、そうなのか？じゃあ見せてもらうよ」

そう言うと三沢はデッキを眺め始めた

「随分考えて組んであるじゃないか、このままでも十分じゃないのか？」

「確かにそうなんだが、そいつは大抵、ワンキルが決まってしまうから面白くない。だから崩す。」

「じゃあ君は試験なのに本命のデッキは使わなかったのか？」

「あぁ…このデッキでも問題なく勝てると思ってたしな」

その言葉を聞いて三沢の顔が若干引き攣っている

「さて、それじゃ俺は帰る。」

俺は三沢から返されたデッキをしまい出口へ向かう

「見ていかないのか？」

「興味無い。試験の結果は郵送だからここに居る意味もない。それじゃ、お互い合格したらまた会おう、三沢」

「あ、あぁ……」

そう言って俺今度こそ、その場を後にした

ターン1　『これが入学試験ってやつ？』（後書き）

作者「と言う事でこの作品の主人公、如月凰雅君です。」

凰雅「どうも…」

作者「精霊が最初から4体もいるなんてすごい状況だね♪」

凰雅「お前のせいだろうが！」

作者「所で今回使用したデッキは？」

凰雅「アンティークのデッキだ。本来は後攻の時パワーボンドでアルティメットゴーレムを出してリミッタ解除でワンキルするデッキな。」

作者「決まったら鬼ですな…」

凰雅「そう言えば！」

作者「なんだ？」

凰雅「タグにオリカなしってあるのにゲームオリジナルはありなのか？」

作者「オリカって自分で考えたカードの事じゃないの？それにタグに『TF参考』って書いてあるじゃん？」

凰雅「もう何も言わん…」

作者「次回の更新は１０日後の１月１４日です。」

凰雅「感想、ご指摘お待ちしています。」

作者「それでは次回もお楽しみに～」

凰雅「『リリカルなのは～夜天を受け継ぐもの～』もよろしくお願いします……ってここでこれ言ってもいいのか？」

作者「それも私の作品だからおｋじゃね？」

ターン2　「ここがデュエルアカデミアってやつ？」（前書き）

作者「更新しました。」

凰雅「意外と速かったな……」

作者「今回はね……それではどうぞ！」

ターン2　「ここがデュエルアカデミアってやつ？」

今、俺はこのデュエルアカデミアの校長の前で腕を組んで仁王立ちしているところだ

「き、如月君……笑顔が怖いんですけど……（汗）」

「どういうことか説明してもらいましょうか？校長……」

俺は右手に持った赤い制服らしき服を校長に突きつけて言う

俺がこんなことをしているのは約2時間前に遡ることになる

～2時間前・船の上～

俺は大量のケースに背を預けて、ヘッドフォンの音楽を聴いている。

俺の膝の上にはエリアが座ってる

「マスタ……誰か来た……」

「ん？」

エリアに言われ顔を向けるとみたことある男が近づいてきた。

「如月、また会ったな……」

「三沢か……」

「ところで君はまだ制服を着ていないのか？」

「あぁ…そう言えばそんなのが送られてきたな…」

「そんなのって……」

「まぁ……どうでもいいが……着なきゃいけないなら着るしかないか……」

ガサガサ……

「これは……」

「どういうことだ？君の成績とあのワンターンキルならブルーは無理だったとしてもイエローは確実なはずなのに……」

アカデミアから送られてきた包みを開けるとそこには赤い制服が入っていた

「どうやらアカデミアに着いたらさっそくＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩ☆が必要なようだな……」

「き、如月…顔は笑顔なのに物凄く怖いぞ……」

「マスタ…怖い……」

エリアも膝から離れ少しばかり震えているように見える

……と言うことがあり、俺は島に着くなり真っ先に校長室に突撃し、冒頭の状況になったのである

「…で？なぜ俺がレッドなんです？成績を考えたらイエローでも問題ないはずですよね？」

「すまない。どうやらこちらの手違いのようなのだ。もう決定して

しまった事なので、私でもちょっと難しいんだよ……」

……これはあれか？神（ジジィ）の策略か？絶対ジジィは腹を抱えて爆笑しているに違いない。そうに違いない、今度会ったら奴を殺す！

再開した時の台詞は

「…お前を殺す……」

で決定だ。

「はぁ……じゃあいいです。別いどこでもよかったですし……」

「そうですか……」

「ただし、俺の住む部屋は一人部屋にしてくれ。確か、寮の部屋割は入学式の後だろう？」

「よく知ってますね……」

「アカデミアの案内は前もって読んでいましたし……」

「そうですか…分かりました。それくらいでしたら何とかできます。」

「それでは俺はこれで…入学式もありますし……」

「わかりました。アカデミアでの生活を頑張ってくださいね。」

校長の言葉を聞いた後俺は校長室を後にした

・・・・・・

・・・

・

眠すぎる入学式が終わり俺はレッド寮に向かった

「これは……」

「ボロッちいですね…凰雅。」

「マナ！そう言うことを言うんじゃない！」

「は～い……ところで凰雅、それ…重くないの？」

「持ち上げるくらいには鍛えている……」

「流石凰雅殿だ。常に鍛練を忘れないその心意気。マナ……お前も見習うんだぞ。」

「は～～い……」

そんな事を話していたら、誰かが寮から走ってきた。

茶色っぽい髪の少年に水色の紙に眼鏡をかけた少年だ

「お～い！お前も新入生か？」

「お前は？」

「俺は遊戯十代！」

「僕は丸藤翔ッス！」

まさか原作キャラと出くわすとは……

まぁ三沢と会っていたし、レッドに所属になった時点でこの展開は必然か……

「十代と翔か…俺は如月凰雅。よろしく」

「如月君って、もしかして実技試験でワンターンキルを成功させた人！？」

「一応な……」

「マジで！？スゲーなお前！俺とデュエルしてくれよ！」

十代がディスクを構えて言ってくる

「悪いが今は部屋に荷物を置きに行きたいんだが…これ結構重いんだが…」

「うわ～すごい数のケースだね……」

「それに俺もお前も同じ寮なんだから焦らなくてもいつでもデュエルできるだろ？」

「それもそうか…」

「じゃあ、俺は行くぞ……」

そう言って俺はレッド寮に向かった

・・・・・・

・・・

・

「はぁ～校長、一人部屋を希望したが他の部屋より広くないか？」

「良いじゃないですか！凰雅！広くて損はありませんよ～」

「マナの言うとおりだな……じゃあ俺は寝る。マハード、ユベルな

んかあったら起してくれ。」

「別に僕だけに頼んでくれればいいのに……」

「じゃあユベル。なんかあったら起せよ。」

「わかったよ。凰雅、任せておくれ」

ユベルって扱いやすいのか難いのかよく分からないな……

そんなことを考えながら俺は意識を手放した

・・・・・・・

・・・

・

ドン！ドン！ドン！

突然俺は部屋のドアが連打される音で目が覚めた

「……おい、ユベル。なんかあったのか？だとしたら何で起こさなかった？」

「さっき寮生の人が歓迎会があるとか言ってたけど、どうせ凰雅は行かないだろうから起こさなかったよ。今ドアを叩いてるのは十代と翔って言ったっけ？その２人が叩いてるよ。」

「はぁ～～～」

俺は今起きている出来事にため息を漏らす。

なんで入学初日からこんなに疲れるんだ？

「とりあえずユベル、お前は隠れてろ。」

「何故だい、凰雅？」

「精霊の見える十代はお前の事知ってるんだぞ？お前の事がバレると面倒なんだよ。」

「それを言うならマハードとマナもまずいんじゃないのかい？」

「マハードとマナは遊戯の精霊だから何とか誤魔化しようがあるが、お前はどうにもならない。だから頼む。」

「しょうがないね…他ならない凰雅の頼みだし…分かったよ、十代がいる間は僕は隠れてるよ。」

「ありがとう。ユベル…」

「例には及ばないよ。僕と凰雅の仲じゃないか……」

そう言ってユベルは姿を消した。

ユベルが消えたのを確認した後俺はいまだに連打されている扉に向かう

ガチャ……

「誰だ？俺の睡眠を邪魔する奴は？」

「うおっ！びっくりした～俺だ、十代だ。」

「なんだ十代？俺に何か用か？」

「決闘（デュエル）しようぜ！」

やっぱりこいつは決闘（デュエル）馬鹿だ

「…はぁ…わかった。どこでするんだ？」

「確か…デュエル場があるはずッス！そこに行こうッス！」

「分かった……待ってろディスクとデッキを取ってくる。」

移動の最中十代にマナ、マハード、エリアについて聞かれたので、所々嘘を交えながら説明した

・・・・・・

・・・

・

「はぁ……」

俺は今日何度目かわからないため息を漏らす

今俺は原作キャラの一人、万丈目準とその仲間達に絡まれていた

「なぁ、凰雅…あいつ誰だ？」

十代が万丈目を指差しながら俺に聞いてくる。どうでもいいが十代の俺への呼び方がいつの間にか呼び捨てになってる……

「貴様！万丈目さんを知らないのか！？」

「万丈目？」

「万丈目準。最近勢力を伸ばしている万丈目グループの三男。」

「ほう…よく分かってるじゃないか……よく調べたな……」

「情報は武器だからね……」

「万丈目グループ？」

「KC社の傘下に無いグループで最近成長が著しいグループだ。ただ、その急激な成長ゆえか周りの企業からは『成金企業』と呼ばれているらしい……」

「そこまで知っているのか！？」

「で？その万丈目グループの万条目準さんが俺たちに何を教えるって」

「貴様……「何をやってるの！？」」

万丈目が何かを言おうとした時、デュエル場の入口から金髪の女子生徒がやってきた

「て、天上院君…僕は彼らにこの学園の事を教えていただけだ」

「万丈目君、そろそろ寮の歓迎会が始まるわ……」

「くっ……いくぞ！お前達！」

そう吐き捨てると万丈目とその愉快？な仲間達は出ていった。

「あなた達、あの人たちには関わらない方がいいわよ？」

「ご忠告どうも。ところで君は？見たところブルー生みたいだけど？」

「私は天上院明日香、あなたは？」

「俺は如月凰雅、見ての通りレッド所属だ。」

「如月凰雅……確か入学試験で唯一試験官にワンターンキルを成功させた人ね…」

「どんだけ話が広がってるんだよ……」

「なぁなぁ、凰雅？」

俺がうなだれていると十代から声がかけられる。

「なんだ？十代…」

「オベリスクブルーって偉いのか？」

「「「……」」」

十代以外今の発言に凍りつく……こいつがこんなに馬鹿だったとは……

「十代、お前は入学案内を読んでないのか？」

「おう！」

「……なら説明してやる。この学園は全学年共通で上からオベリスクブルー、ラーイエロー、オシリスレッドの三つのクラスにクラス分けされる。」

ちなみに神のランクで一番高いラーが一番上のランクのクラスじゃないのはエネコン社長…じゃない、海馬瀬人の趣味との噂らしい……

「で、オベリスクブルー……長いからブルーと省略する。ブルーになるにはこの学園の中等部からの進学組か、この学園から送られてくる『特別推薦状』を持った入学試験優秀受験生だけが入れるクラスだ。俺や十代、翔の様な高等部からの受験生はイエローか、レッ

ドだ。ちなみに女子は高等部からの受験でもブルーだ。」

「『特別推薦状』？」

明日香が反復するように効いてくる

「特別推薦状はこの学園の校長自らが大小関わらず何らかのデュエル大会で優秀な成績を持ってる中学卒業見込みのある生徒2人に送られる推薦状だ。高等部からの受験にも拘らず優秀な成績で合格したならブルー生になれるし、学費も3年間免除される。」

「でも、凰雅君はなんでそんなこと知ってるんすか？特別推薦状なんて入学案内にも載ってないッスよ？」

「なんでもなにも、俺ともう一人、イエローに所属になった受験番号1番、三沢大地がその特別推薦状をもらったからだ。」

「「「えっ！？」」」

皆が目を見開いて驚いている

ちなみに三沢はこの事を船の上で教えてくれた。

筆記でトップだった三沢もブルーになれなかったのだから結局俺も普通ならイエローだったんだが……ジジィの所為で↑言いがかり

「分かったか？納得したか？」

「話はわかったけど…それじゃあなんであなたはレッドに居るの？あなたの受験番号は８番それにワンターンキルも成功させたのに……」

「なんでも教師側の不手際でレッド所属になっていた。俺は学費が免除になればどこでも良かったからな…校長にひとり部屋を用意してもらうことを条件にレッド所属に納得した。」

「あの～……質問良いッスか？」

オズオズと翔が手を上げて聞いてくる

「なんだ？翔」

「なんで女子はブルー行きが決定してるんすか？」

「その理由は簡単だ。単純な話、入学する女子生徒の数が少ないからだ。」

「ええ！そんな理由なんッスか！？」

「そんな理由だ。今回の女子の合格者は男子の１／１０以下らしい」

「なぁ、そんなこといいからデュエルしようぜ！」

……お前のために話したのに丸々無視かテメェ…

「十代、お前のために説明したのにそんなこと扱いか…それにもうすぐ寮の歓迎会だ、決闘は後日、俺から連絡するから……」

「ちぇ…分かったよ。じゃあ寮に戻ろうぜ！」

「あ！待ってよアニキ～！」

十代と翔はさっさと寮に行ってしまった。

「それじゃ、俺も行くか……縁があったらまた会いましょう？明日

香さん」

「明日香で良いわ、なんかあなたがさん付けで呼ぶと違和感があるのよ。敬語もいらないわ」

今の明日香の性格が原作より若干丸くなってるのはなんでだ？まあ良いけど……

「そう？じゃあ俺の事も好きに呼んでくれて構わない。じゃあな……」

「えぇ…縁があったらまた会いましょう、凰雅」

縁があったらっていうけどこのまま原作通りに進むなら意外と早く再開するんだがな……

明日香のその言葉を聞きながら俺はレッド寮に向かった

・・・・・・・

・・・・

・

その後寮の歓迎会も滞ることもなく終わり、今風呂から帰ってきた俺の前に……

「凰雅、凰雅～なんか凰雅の…ＰＤＡだっけ？それにメールが来てるよ～」

「はぁ？メールだぁ？」

俺はタオルで濡れた髪を拭きながらＰＤＡを見る、そこには……

『ドロップアウトボーイ。午前０時に決闘場で待っている。互いのベストカードを賭けたアンティルールで決闘だ。勇気があるなら来るんだな。　ｂｙ万丈目』

と書いてあった。ちなみに現在の時刻…午後１１時

「……俺はこれから寝るって言うのにあの野郎…」

「うわぁ……凰雅から黒いオーラが出てるよ……」

俺は無言でカードの入ったケースを開け、そこからデッキを取り出

し、デッキの調整を始めた

ちょうどその時、外に散歩に出ていたユベルが帰ってきた

「ん？凰雅、何をしているだい、怖い顔して？」

「デッキの調整。」

「近々決闘でもするのかい？」

「今晩０時にな……」

ユベルとの会話もそこそこに、俺は万条目（バカ）との決闘のためにデッキを仕上げていった

俺の入学初日は終わらない……

ターン2　「ここがデュエルアカデミアってやつ？」（後書き）

作者「いかがだったでしょうか？ちなみにこの作品内のクラス分けは私の独自設定です。」

凰雅「通りでな……おかしいと思ったんだ。まずは感想のお礼から！」

作者「霞さま！感想ありがとうございます！」

凰雅「ありがとうございます。」

作者「そう言えば凰雅くん、君が持ってきたカードの入ったケースはいくつだい？」

凰雅「たしか１０個ほどだったかな……」

作者「どうやって持ってきたの？」

凰雅「紐でまとめて。」

作者「さようですか……」

凰雅「次話は何の話だ？」

作者「万条目御一行様と決闘。」

凰雅「眠いのに俺を呼びつけた奴らをどうしてくれようか……」

作者「こえー……あ、後お知らせです。」

凰雅「なんだ？」

作者「この作品を読んでくださっている皆さまに凰雅の元に来る精霊を募集します。この作品の感想のところになんの精霊のなまえ、マナやハマードのようにカード名ではない名前（↑これはお好みで）性格を書いて送ってください！」

凰雅「まだ精霊増えんのか！？」

作者「タグに精霊いっぱいって書いてあるじゃん？よいってもあんまり多いと全員回せない可能性があるからたくさん案が来たら選考しなきゃいけないけど……」

凰雅「マジかよ……」

作者「それでは…ご感想、ご指摘お待ちしています。」

凰雅「次回もお楽しみに。次回の更新は１月２０日を予定しています。作者の事ですから予定通りかは分かりませんが……」

作者「否定できないｏｒｚ」

ターン3　「学園初決闘ってやつ？」（前書き）

作者「予定より1日遅れ～」

マナ「しょうがないやつめ～」

エリア「やつめ～」

凰雅「阿呆なこと言ってないでさっさと始めろ作者。」

作者「何故に俺だけ！？」

ターン3　「学園初決闘ってやつ？」

～凰雅ｓｉｄｅ～

俺の安眠を邪魔したバカの粛清のためにディスクをつけてブルーの決闘場に来ていた。

原作でもここで十代が万丈目と決闘していたし多分ここだろう……

俺が決闘場につくと十代、翔、明日香がいた。どうやら原作通り十代も万丈目に呼ばれていたらしい…

「ん？貴様は…」

万丈目が何か言っているがスルーの方向で…俺は十代に近づき

「よう、十代、お前も呼び出されたのか？」

「おう！凰雅！そうなんだよ、さっきメールでな！」

「ふーん…で、どうして明日香がここに？」

「な！？貴様、天上院君を呼び捨て！」

相変わらずなんか言ってくる万丈目は放って置いておく

「偶々よ。」

「偶々？」

「……偶々…」

偶々ならなぜ視線をそらす…やっぱり、明日香がここに居るのは十代の実力を見るためか…

「おい！」

「なんですか？」

いい加減万丈目がうるさいので返事をしてやる

「無視するんじゃない！なぜ天上院君を呼び捨てにしている！？そしてなぜ貴様がここに居る！？」

「大声で一遍に質問しないでください。明日香を呼び捨てにしているのは本人に構わないと言われたから、ここに居るのはあなたがここに

呼びだしたのでしょう？」

俺は万丈目にＰＤＡを見せる

「バカな、俺は遊戯十代しか呼んでいないぞ！」

は？何言ってんだこいつ…ん？なんか取り巻きの１人が前に出てきた

「すいません万丈目さん、こいつの事が気に食わなくて…」

どうやら取り巻きの奴が勝手に万丈目の名前を使って俺を呼んだらしい、つまり……

「俺の睡眠時間を削ってくれたのはお前か？」

俺が声のトーンを落とし敬語もやめて取り巻きの男を見る。

するとなぜか十代、翔、明日香が後ろで若干顔を青くしていた

「ヒソヒソ……（おい、なんか凰雅怖くないか？）」

「ヒソヒソ……（あなたも？実は私もなのよ…）」

なんか十代たちが小声で何か言ってるが良く聞こえない

「万丈目はそのまま十代と決闘すればいいよ。俺はこの…睡眠を邪魔したバカを潰す。」

「万丈目さんだ！…フン、少々状況が変わったがやることには変わりは無い。ドロップアウト！俺と決闘だ！」

「いいぜ！その決闘乗った！」

向こうは原作どおりってところかな？……さてこっちは……

「こっちもやろうか？さっさと帰って寝たい。」

「なめるなよ！オシリスレッドが！」

今から君そのオシリスレッドの俺の負けるんだよ……

「来なよ……螺子(ねじ)伏せてやるから…」

「「決闘(デュエル)!!」」

凰雅　ＬＰ４０００

取り巻き　ＬＰ４０００

「先行は俺が貰う、ドロー。…俺は『サイバー・ヴァリー』を攻撃表示で召喚。さらに手札の『イエロー・ガジェット』と『レッド・ガジェット』を手札から墓地に捨て、手札の『マシンナーズ・フォートレス』を特殊召喚!」

俺の場に機械の蛇のようなモンスターと下半分がキャタピラのような形をして、右肩?に大きな大砲を付けたモンスターが現れる

サイバー・ヴァリー　ＡＴＫ０

マシンナーズ・フォートレス　ＡＴＫ２５００

「何！？攻撃力２５００だと！？」

「こいつは手札から機械族モンスターをレベル８以上になるように捨てることで、手札、または墓地から特殊召喚が可能なんだよ。さらにカードを１枚伏せてターンエンド。」

凰雅　ＬＰ４０００　手札１

「くっ！俺のターン、ドロー！俺は『ゴブリン突撃部隊』を召喚し、『デーモンの斧』を装備させる！行け！『マシンナーズ・フォートレス』を破壊しろ！」

ゴブリン突撃部隊　ＡＴＫ２３００→３３００

「永続罠、『分岐ーディヴァジェンス』を発動。自分の場に機械族モンスターが２体以上存在し、自分の機械族モンスターが攻撃対象に選択された時、ほかの自分の機械族モンスターに攻撃対象を変更させることができる！俺は攻撃対象を『サイバー・ヴァリー』に変更！」

「わざわざ攻撃力０のモンスターに対象を変更させるだと？バカが

！そのまま破壊しろ！」

ゴブリン達が『サイバー・ヴァリー』に飛びかかってくる

「『サイバー・ヴァリー』が攻撃対象になった時、このカードをゲームから除外することでバトルフェイズを強制終了させ、俺はデッキから1枚ドローする。」

バトルの強制終了だから『ゴブリン突撃部隊』の表示形式は変更されないが…

「クソ、俺はカードを1枚伏せて、ターンエンドだ。」

取り巻きA　LP４０００　手札３

あの伏せカードは十中八九攻撃反応型の罠だろな…あんまり関係ないけど…

「俺のターン、ドロー。手札から永続魔法、『前線基地』を発動、手札からユニオンモンスターを1体特殊召喚する。俺は手札から『強化支援メカ・ヘビーウェポン』を特殊召喚。さらに『スクラップ・リサイクラー』を守備表示で召喚。『スクラップ・リサイクラー』が召喚に成功した時、デッキから機械族モンスターを1体墓地に送

る。」

強化支援メカ・ヘビーウェポン　ＡＴＫ５００

スクラップ・リサイクラー　ＤＥＦ１２００

「さらに『スクラップ・リサイクラー』の効果発動。墓地のレベル４の機械族モンスター２枚をデッキに戻してシャッフルし、その後デッキから１枚カードをドローする。」

俺は『イエロー・ガジェット』と『レッド・ガジェット』をデッキに戻す、手札に『一族の結束』が無いから問題ないしな…仮にこのドローで『一族の結束』を引いても墓地にリサイクラーの効果で墓地に送った『グリーン・ガジェット』があるから問題ないし…

「今引いたカードは『強欲な壺』。これを発動し、２枚ドロー。」

新たに引いたカードは……俺こんなにチートドローではなかったはずなんだがなぁ…

「ヘビーウェポンをフォートレスに装備カード扱いで装備、さらに手札から永続魔法『一族の結束』を発動。墓地のモンスターの種族が１種類の時、そのモンスターと同じ種族の自分の場のモンスター

の攻撃力は８００ポイントアップする！さらにこの瞬間、手札から速攻魔法『サイクロン』を発動！お前のその伏せカードを破壊する！」

「なんだと！？そんなカードが！？おまけに伏せカードまで…クソ、ミラーフォースが……」

やはり攻撃反応型の罠か…

マシンナーズ・フォートレス　ＡＴＫ２５００→３０００→３８００

「攻撃力３８００だと！？」

「バトル！『マシンナーズ・フォートレス』で『ゴブリン突撃部隊』に攻撃！薙ぎ払え！！」

フォートレスの右肩？についた巨大な大砲から赤いビームが打ち出された

ゴブリン達はビームに飲み込まれて消滅した

「ぐあああ！」

取り巻きＡ　ＬＰ４０００→３５００

「ターンエンド。」

凰雅　ＬＰ４０００　手札０

「俺のターン、ドロー！俺は『ジャイアント・オーク』を召喚！『ジャイアント・オーク』で『スクラップ・リサイクラー』を攻撃！」

ジャイアント・オーク　ＡＴＫ２２００

巨大な鬼のようなモンスターがスクラップ・リサイクラーに襲いかかる

「俺の場のカードを忘れたのか？『分岐ーディヴァジェンス』の効果で攻撃対象を『マシンナーズ・フォートレス』に変更する。」

ジャイアント・オークの進路が急に変わり、フォートレスに突っ込んでくる

「しまった！手札から速攻魔法『収縮』を発動！『マシンナーズ・

フォートレス』の攻撃力を半分にする！」

マシンナーズ・フォートレス　ＡＴＫ３８００→２５５０

「迎撃し、焼き払え！」

オークの攻撃が届く前にフォートレスの放ったビームがオークに直撃し、オークが消滅した

「何故だ！『収縮』を使ったんだから攻撃力が半分の１９００になるはずなのに！？」

「テキストを良く見ろ、『収縮』の効果は元々の攻撃力を半分にするんだ、さらにややこしんだが『収縮』で攻撃力が半分になったモンスターが攻撃力増減系の永続効果を受けていた場合、元々の攻撃力を半分にした後永続効果の増減を再計算するんだよ……よって、まず最初に『収縮』の効果で攻撃力が半分になって１２５０になったあと永続効果の『一族の結束』と『強化支援メカ・ヘビーウェポン』の効果により攻撃力に１３００が加えられ、最終的にフォートレスの攻撃力は２５５０になり『ジャイアント・オーク』を撃破できたと言う訳だ。理解したか？納得したか？」

「クソォ！！俺はカードを２枚伏せてターンエンド！」

取り巻きA　LP3500→3150　手札0

「俺のターン、ドロー。」

チッ、『大嵐』や『ハリケーン』は来なかったか…

「『前線基地』の効果で『マシンナーズ・ピースキーパー』を特殊召喚して『スクラップ・リサイクラー』にユニオン。フォートレスでダイレクトアタック！」

「ぐわあああああああ！」

取り巻きA　LP3150→−650

……なんで伏せカードが発動しないんだ？もしかして2枚ともブラフか？

ま、いっか…

俺は項垂れている取り巻きをそのまま放って、いまだに十代の決闘見ている明日香の元に向かった

・・・・・・・
・・・
・

～明日香ｓｉｄｅ～

如月凰雅…入学試験の時に試験官相手に１ターンキルを決めた男…今万丈目君と戦っている遊戯十代と同じく興味を引いた人……

十代が万丈目君に呼ばれて決闘するって話を聞いて偶然を装ってきた見ればまさか凰雅まで来るなんて…

話を聞くとどうやら凰雅は万丈目君にいつもついてきている人の方に呼ばれたみたいだけど、それにしても睡眠時間を邪魔されたからってあの怒りよう…よっぽど睡眠時間を削られるのが嫌みたいね…凰雅の後ろに鬼が見えたわ…

十代の決闘を見ながら凰雅の決闘を見てみると十代ほど変わった戦い方をしているわけじゃなかった

十代のように融合を多用したり罠カードでコントロールを奪い返したりはしていない。

相手が攻撃してきたら罠カードとモンスターの効果でダメージを防ぎ、相手のモンスターの攻撃力が高かったらそれよりも攻撃力の高いモンスターを用意して倒す。

見たこともないようなカードを多く使っているけど平凡で基本的な戦い方に見える。

そう考えているうちに凰雅は決闘を終え、こちらに歩いてきた。

「なんだ、見ていたのか？明日香」

「ええ、十代の決闘を見ながらだけど…それにしても最後は結構迂闊ね。伏せカードが罠だったらどうしていたの？」

「それは俺も考えてはいた。想定していたのは俺が新たにモンスターを出した時『激流葬』で破壊する。攻撃してきたところを『炸裂装甲』で破壊する2枚目の収縮で攻撃力を半分にしてダメージを減らす。なんかだな。後モンスター次第では『奈落の落とし穴』辺りも考えていたけど…」

そこまで予測してたの！？

「じゃあどうして？」

私がそう聞くと凰雅はデッキから2枚のカードを取り出し私に見せてきたカードを見ると1枚は凰雅が最後に出した『マシンナーズ・ピースキーパー』、もう1枚は『マシンナーズ・ギアフレーム』の

カード……

「これは…」

「『マシンナーズ・ピースキーパー』は破壊され墓地に送られた時、デッキからユニオンモンスターを１枚手札に加えることができる。もし『激流葬』ならピースキーパが破壊され、効果でその『マシンナーズ・ギアフレーム』を手札に加えていた…そいつもユニオンモンスターだからな。」

凰雅に言われてテキストを見ると確かにユニオンと書いてあった

「さらに俺はピースキーパーを『前線基地』の効果で出したから通常召喚は行っていない。よって手札に加えたギアフレームを召喚。ギアフレームは召喚に成功した時デッキから「マシンナーズ」と名の付くモンスターを手札に加えることができる。さらに言えば『マシンナーズ・フォートレス』はユニオンモンスターを装備していた。ユニオンモンスターを装備しているモンスターが破壊されるとき装備しているユニオンモンスターを身代りにできる。よって『激流葬』が使われた場合は最終的に『一族の結束』で強化された攻撃力２６００のギアフレームと３３００のフォートレスが残っていた。もう１枚が『奈落の落とし穴』だったとしても『炸裂装甲』や『収縮』だったとしても相手は殆ど詰んでる。手札ＬＶ４の機械族モンスターがいるから次につながるし…」

私は唖然としていた。迂闊な行動でも何でもなく相手の行動を読んでの攻撃…

私が茫然としている間に凰雅はカードをしまいその場を去ろうとしていた

「俺は眠い。帰って寝る。それじゃ…」

「あ、そうなの？それじゃおやすみ凰雅…」

自然と私は返事を返していた。凰雅は手をヒラヒラと振りながら決闘場を後にした

如月凰雅……面白い男…私はそう思った

ターン3　「学園初決闘ってやつ？」（後書き）

作者「いかがだったでしょうか？」

マナ「私の出番が無〜い〜！！」

エリア「……ない…」

作者「だからこうして前書きとあとがきに…って痛い痛い！エリアちゃん無言で杖で俺の頭をゴンゴンしないで！」

マナ「じゃあ次は私達を出しますか？」

エリア「……（杖を振り上げている）」

作者「善処します……それより感想のお礼！」

マナ「竜王さま！ウツイさま！感想ありがとう〜！」

エリア「……ありがとうございます。」

作者「それじゃ今回はこの辺で…」

マナ「その前にお知らせ！この作品を読んでくださっている皆さまに凰雅の元に来る精霊を募集しま〜す！この作品の感想のところに応募する精霊のなまえ、わたしやお師匠様のようにカード名ではない名前（↑これはお好みで）、性格を書いて送ってください！待ってまーす！」

エリア「……ます。」

作者「それでは…ご感想、ご指摘お待ちしています。」

マナ「次回もお楽しみに～♪次回の更新は1月31日を予定しています。作者の事ですから予定通りかは分かりません！」

エリア「ダメダメ作者。」

作者「エリアが言うとダメージがでかい…」

主人公と精霊の設定ってやつ？（前書き）

作者「凰雅と精霊たちの設定です。精霊は増えればその都度更新していきます」

５／１８：設定を追加

主人公と精霊の設定ってやつ？

・主人公設定

名前：如月凰雅（きさらぎおうが）

年齢：十代と同じ年

見た目：『めだかボックス』の球磨川禊に1～2？位のアホ毛が生えている

性格：面倒事が嫌い、マイペース。

得意なゲーム：基本はどのジャンルもできる。得意なのはシューティング

好きなもの：睡眠、猫、たいやき

嫌いなもの：睡眠を邪魔するもの、転生させた神、ネズミ、魚介類

特技：料理、速読

口癖：「螺子伏せてあげるよ…」「理解したか？納得したか？」

使用デッキ：その都度違うデッキを使う。メインデッキは持っているがまだ未使用

備考：神のミスでＧＸの世界に転生させられた。たくさんの精霊に振り回され、主人公の十代たちに振り回される運命を持つかもしれ

ないオリ主

・精霊設定

その1

名前：ユベル

年齢：不明

性格：凰雅第1な性格

得意なゲーム：『バ〇オ』アクションゲーム

好きなもの：凰雅

嫌いなもの：凰雅に害成すもの

口癖：あるらしいが不明

使用デッキ：有るらしいが不明

備考：十代のユベルとは違う存在のユベル…凰雅命な奴

その2

名前：マナ

年齢：禁則事項です♪

性格：一言で言うなら明るい性格

得意なゲーム：音ゲー

好きなもの：凰雅の料理、楽しい事

嫌いなもの：ジャンクフード、退屈な時間

使用デッキ：有るけど未使用

備考：決闘王、武藤遊戯の精霊、なぜか凰雅の所に居る。

その3

名前：エリア

年齢：…秘密

性格：『涼宮ハルヒの憂鬱』の長門有希なイメージで

得意なゲーム：格闘ゲーム　ゲームを始める前に「私の難易度を決めて」と聞くぐらい強い

好きなもの：凰雅、テレビ、凰雅の料理

嫌いなもの：特にないらしい…

使用デッキ：あるけど未使用

備考：凰雅の精霊、口数が少ない、怒ると手に持った杖で叩く癖がある

その４

名前：マハード

年齢：２０代らしい…

性格：まじめな性格

得意なゲーム：パズルゲーム…たまにやってるらしい

好きなもの：平和な日常、お茶

嫌いなもの：争いごと、炭酸飲料

使用デッキ：有るけど未使用

備考：マナと同じ武藤遊戯の精霊、凰雅の精霊メンバーの良心的存在、苦労人

その５

名前：レミリア

年齢：秘密よ？

性格：若干気まぐれ

得意なゲーム：テーブルゲーム…特にチェスが得意

好きなもの：紅茶、暇つぶし

嫌いなもの：熱いもの…猫舌、紅茶も少し冷まして飲んでいる

使用デッキ：凰雅のデッキを勝手に使うため特定のデッキを持っていない

備考：凰雅がネタに走ったために登場した精霊。おぜうさま。凰雅精霊チームの幼女その１

その６

名前：メイ

年齢：１０才くらい？

性格：明るく甘えん坊

得意なゲーム：育てゲー

好きなもの：凰雅、綿飴

嫌いなもの：苦いもの

使用デッキ：未使用

備考：ドライバー様のアイデアの精霊。幼女精霊その２

その７

名前：クゥリィ

年齢：１０才くらい…

性格：クールっぽい性格。（凰雅限定で甘えん坊？）

得意なゲーム：ＲＰＧ

好きなもの：凰雅、チョコレート

嫌いなもの：辛い物

使用デッキ：未使用

備考：ドライバー様からのアイデアの精霊。幼女精霊その３

その８

名前：サレス

年齢：たぶん２０代前半

性格：おっとり

得意なゲーム：クイズゲーム（多分マハードの次くらいに頭がいい）

好きなもの：お茶（緑茶でも紅茶でもＯＫらしい…）・ケーキ

嫌いなもの：苦い食べ物・辛い食べ物

使用デッキ：魔力カウンター主体の魔法使い族デッキ……の予定…

備考：峠　陸哉さまからのアイデア精霊。精霊メンバーの常識人…のはず…

主人公と精霊の設定ってやつ？（後書き）

こんな感じです

ターン4「これがキング〇リムゾンってやつ？」（前書き）

蒼影「地震後初めての更新です。」

マナ「もう一つの方の小説が先じゃないの？」

蒼影「こっちが先に書きあがったからこっちから」

マナ「ふーん…ま、いっか。」

蒼影「それではどうぞ！」

ターン4「これがキング○リムゾンってやつ？」

「キン○クリムゾン！」

「どうしたんだい、マナ？急に大声出したりして」

「いや～なんか言わないといけない気がして…」

「それはいいけど、僕はともかくマナまで留守番なんて珍しいね？」

ユベルはお茶をすすりながらマナに聞く

「だってぇ～夕べ凰雅が～」

マナが無くれた顔でテーブルに突っ伏す

「あぁ……夕べのアレか…まったく、凰雅の楽しみだった杏仁豆腐を食べたのが悪いんじゃないか…」

ユベルはやれやれと言った顔でテレビの電源を入れる

「だって、おいしそうだったんだもの…ってユベルはまたゲーム？
今日は何やるの？」

「バ〇オ５のプロフェッショナル。」

「じゃあ私もやる！」

マナもテレビの前に座り、コントローラを握った

「ミスってやられないでね？」

「そっちこそ！」

留守番組は平和だった……

・・・・・・

・・・

・

～凰雅ｓｉｄｅ～

なんかツッコミを入れなければいけない気がしたが、まぁいいだろう…

アカデミアに入ってそろそろ1週間が過ぎようとしているのだが…

俺はふと思った

原作の細かいイベント忘れたけどどうしようかと

原作の大筋は覚えているのだが、細かい部分を完全に忘れた。

まぁいいか、その時はその時だ……

・・・・・・

・・・

・

時間がとんで夜。

（え？授業？わざわざ言う必要があるのか？と言う訳でカットｂｙ作者）

俺はシャワーを浴び終え、寝間着に着換えて寝る準備は万端だ。

「凰雅〜！敵が強すぎるよ〜（＞＜）」

「だから言ったのに…」

マナとユベルは休憩をはさみながら今までずっとバ〇オ５をしていたらしい…

中盤ぐらいまで進んだらしいがどうやらマナが敵に倒されてしまうため詰まっているようだ。

「知らん、俺は寝る。やっててもいが音量は下げろよ？」

ちなみにこの部屋はマハードの魔術によって防音は完璧。なんという魔術の無駄遣い

俺が、ガンダムだ！！〜〜俺が、ガンダムだ！！

「…何この音？」

何処かのガンダムマイスターの名台詞？迷台詞？の発信源を探すと発信源はＰＤＡだった…

「なんで着信が変わってるんだ？」

「あ～多分僕がさっき弄ったせいかな？」

ユベルがバツの悪そうな顔で言ってくる

なぜ弄った？なぜこれなんだ？なんでこんな着信音があるんだ？

と言う疑問は置いておき、俺は電話に出た

『凰雅！大変だ！』

「俺にとっては大変じゃない。」

『何バカなこと言ってるんだよ！翔が攫われたんだ！』

翔？あいつが？なんで？

確かにあいつ今日ニヤニヤしてたけど……なんだっけ？これ、なんのイベントだっけ？

『とにかく今からそっちに行くから待っててくれ！』

「ちょっと待て！十代！……ちっ！切りやがった…」

「どうするんだい？凰雅。」

「とりあえず隠れろ！十代が来る！」

「わっ、わっ！とりあえず電源を！」

「わぁ！待ってマナ！まだセーブが！」

ブツッ！

「あ～～～～～」

「ユベル、早く隠れろ」

「ちくせう……」

そういってユベルは消えた

最近ユベルが染まってきている気がする…何に染まっているかは推して測ってくれ…

ドンドンドン！！

そうこうしているうちに十代がやってきた

このままドアを連打されても困るので俺はドアを開ける

「凰雅！大変なんだ！」

「さっきも聞いた…翔が攫われたって？」

「ああ！なんか、返してほしければ来いって……」

「俺も呼ばれたのか？」

「いや…でも凰雅もいれば心強いからな！」

俺は呼ばれてないのに巻き込まれたのか…目の前のこの馬鹿を殴りたい…

その前に今回の原因である翔をさらった奴を殴りたい…後、元凶の翔を殴りたい…

「わかった……今ディスクを持ってくる。待ってろ…」

「おう！」

・・・・・・

・・・

・

と言う訳で十代と俺でボートを漕ぎ、やってきたのは女子寮…

……女子寮？

……あー！思い出した！ラブレター事件か！

おk、とりあえずあんな偽物のラブレターにホイホイついていった翔（アホ）はお仕置きだ。

寮につくと明日香と取り巻き2名と翔(アホ)がいた。

「アニキ～！凰雅く～ん！」

翔(アホ)がなんか言っているのはスルーして俺は明日香に話しかけた…

・・・・・・

・・・

・

～明日香ｓｉｄｅ～

私は今困っている……

そう困っているのよ…

オシリスレッドの丸藤翔君が女子寮のお風呂を覗いていたと友達のジュンコとももえが知らせてきたから、前から気になっていた遊城十代の実力を見るため翔君を人質みたいな形にして十代を呼び出した…

なのに…なのになぜ…

「よう…明日香、良い夜だなぁ？」

不機嫌になってる凰雅までやってくるのよ！？

「お、凰雅？なんでここに居るの？ついでになんなのその格好？」

凰雅の格好は水色のパジャマだった…しっかり同じ色の三角のナイトキャップまで付けて…

それに柄が……

「なんでジンベイザメ？」

「俺が好きだから。」

「そ、そう……ところでなんでここに？」

「このデュエルバカに連れてこられた……」

不味いわね…多分寝ていたか寝るところだったのね…

前に万条目君達に呼び出されてた時、寝ていたところを起こされて

かなり怒っていたから

日を改めて凰雅を呼ぶつもりだったのに…

とにかく、凰雅だけでもとりあえず帰して……

「あんた！レッドの癖になに明日香さんに馴れ馴れしく話しかけてんのよ！」

ジュンコ～～～！！寝起きで不機嫌な凰雅に余計な刺激を与えないでぇぇ！！

「『あぁん？』」

え？なに？なんか凰雅の様子が変わってない？

「ひっ！？」

ジュンコとももえは完全に怯えているわね…私も多分腰が引けてると思うわ…

「『おい明日香、とりあえずアホ（翔）を返せ。』」

「括弧の中身が入れ替わってるッス！？」

「『うるさい黙れ』」

「はいっス！！」

凰雅、あなた怖すぎよ！

「『仕方が無い…ここは決闘で決めよう』」

「決闘で？」

十代…あなたは平気なの！？普通に凰雅と会話してるけど…

「『そうだ、十代、俺、ついでにアホの3人で明日香達3人と決闘。先に2勝した方の勝ち』」

「ついに括弧まで消えた！？」

「『う・る・さ・い・黙・れ』」

「はい……（泣）」

「つまり、あなた達が勝ったら翔君を返す。私達が勝ったら？」

「『そこのアホを好きなようにしてくれ。』」

「えええ！？」

「そう、わかったわ。」

「僕の意思は？」

何言ってるの？

「『ねぇよ、そんなもん…』」

「ないわね、そんなもの。」

「うそだどんどこどーん……」

「『んじゃ十代、よろしくさん。』」

「おう！任された！」

と言う感じで胃に穴があきそうな緊張の中私達の決闘が始まった…

ターン4「これがキング〇リムゾンってやつ？」（後書き）

エリア「…エター〇ルフォースブリザード」

ピチューン！

ユベル「いきなり作者がピチュったね……どうしたんだい？エリア」

エリア「私の出番が無い。」

ユベル「マハードもないよ？」

エリア「地の文で1回出てきた。私は無い……」

ユベル「それじゃあ仕方ない。まずは遅くなったけど感想のお礼から」

エリア「蛮之助丸さま、ドライバーさま。ありがとうございます。」

ユベル「次は決闘の回だね。作者曰くここで凰雅のメインデッキの1つを使うそうだよ？」

エリア「楽しみ。」

ユベル「それとお知らせだ。この作品を読んでくださっている皆さまに凰雅の元に来る精霊を募集するよ。この作品の感想のところに応募する精霊のなまえ、マナやマハードのようにカード名ではない名前（↑これはお好みで）、性格を書いて送って来てくれ。待ってるよ」

エリア「それでは皆様。バイバイ…」

ターン5「これがシンクロってやつ？」（前書き）

蒼影「タイトル通りですな…」

エリア「…私の出番…♪」

蒼影「少し無理やりな感じはするｇ……」

エリア「エターナル〇ォースブリザード」

ぴちゅーん！

エリア「…どうぞ…」

ターン5「これがシンクロってやつ？」

～凰雅ｓｉｄｅ～

「ボルテック・サンダー！」

「きゃあああ！」

え？いきなり時間が飛んだ？

そうだっけ？ちゃんと十代ＶＳ明日香はやったぞ？

（十代と明日香の決闘は原作と変わらないのでカットｂｙ作者）

しかし、十代の奴、相変わらずのバカ引き…アレが世に聞く主人公補正と言うやつか…

「さて、これでこちらの１勝だ…次はこちらは俺がやるがそっちはどっちが出るんだ？」

「あたしがやるわ！オシリスレッドなんかには負けないわ！」

今さっき明日香がオシリスレッドの十代に負けたぞ？

「あんなのマグレよマグレ！そう何度もマグレなんか起きないわ！」

こいつ！俺の心を呼んだだと！？まさか…ＮＴか！？

「まぁいいか…それじゃ始めよう…螺子伏せてあげるから」

「返り討ちにしてやるわ！」

「「決闘！！」」

凰雅　ＬＰ４０００

取り巻きその１　ＬＰ４０００

「先行は俺が貰うよ、ドロー！」

手札は…幸先がいい

「モンスターをセット、さらにカードをセットしてターンエンド。」

凰雅　ＬＰ４０００　手札４枚

モンスター　セット１枚

魔法・罠　１枚

「あれだけ強気な割には防御なの？私のターン！」

向こうのデッキは何だっけ？

確か……片方がＧＸでは珍しいロックバーンでもう一方が水属性主体のビートデッキだったような気がする

どっちがどっちだっけ？分かれば名前もわかるのになぁ…

「私はフィールド魔法、『伝説の都　アトランティス』を発動！さらに『ギガ・ガガギゴ』を召喚！」

ギガ・ガガギゴ　ＬＶ５→４　ＡＴＫ２４５０→２６５０

あ、こっちか…じゃあこいつの名前は確か…ジュンコで、あっちの

方がももえだな？

「あれ？確かそのモンスターってレベル５じゃなかったっすか？」

翔…やはりお前はアホなんだな…

「アトランティスの効果だ…アトランティスがフィールドにある限り手札とフィールドの水属性モンスターのレベルが１下がるんだよ…ついでに水属性のモンスターの攻撃力・守備力が２００上がる」

「えーー！！？そんなの卑怯っすよ！」

…卑怯じゃねぇよ…普通だよ俺もやるよこれ…

「いくわよ！『ギガ・ガガギゴ』でセットモンスターに攻撃！」

ギガ・ガガギゴが腕を振り上げながらこっちに突っ込んでくる

「悪いが通さず、伏せ（リバース）カードオープン、『和睦の使者』！このターン、俺のモンスターは戦闘では破壊されず、戦闘ダメージも０になる」

ギガ・ガガギゴの腕がバリアのような膜に阻まれ、裏になっていたカードが表になった

「セットモンスターは『水霊使いエリア』だ」

《やっと…私の出番…》

エリアが意気揚々？な感じで出てきた

水霊使いエリア　ＬＶ３→２　ＤＥＦ１５００→１７００

「エリアの効果発動、このカードがリバースした時、相手フィールドの水属性モンスター１体のコントロールを得る。」

《おいで…私の所に…》

エリアが手招きしているが、ギガ・ガガギゴは抵抗しているようだ

《……（イラッ）》

ドカッ！！

あ～エリアの奴相手がなかなか来ないから杖でぶん殴って連れてきた…首根っこ捕まえて…

確かエリアの攻撃力って５００くらいだよね？

２０００超えのギガ・ガガギゴを殴り倒すなんて……恐ろしい（汗）

「なんか…凄く納得できない取られ方したけど…私はカードを伏せてターンエンド！」

ジュンコ　ＬＰ４０００

モンスター　なし

魔法・罠　『伝説の都　アトランティス』

「俺のターン！」

引いたカードは…

…前にも言ったかもしれないけど、俺も大概チートドローな気がしてきた…

「俺はチューナーモンスター、『氷結界の水影』を召喚！

氷結界の水影　ＬＶ２→１　ＡＴＫ１２００→１４００

「「「「「チューナーモンスター？？」」」」」

説明は後で良いか…

「レベル２『水霊使いエリア』とレベル４『ギガ・ガガギゴ』にレベル１『氷結界の水影』をチューニング！」

ＬＶ２＋４＋１＝７

エリアとギガ・ガガギゴが輝く６の星になり、緑のリングになった水影の間を通る

「うお！？なんだ！何が起きるんだ！？」

「なに！？なんなのよ！？」

「これは…一体…」

「明日香さん！なんですの！これは！？」

「なんか…凄そうッス～～～！！」

十代、ジュンコ、明日香、ももえ、翔も何が起きたのかわからない様子だ

「凍てつく冷気が全てを凍らせ滅びが訪れる、凍てつく槍で敵を貫け！シンクロ召喚！顕現(けんげん)せよ、『氷結界の龍　グングニール』！！」

辺りが光った後、そこには氷の体をした龍がそこに居た

氷結界の龍グングニール　ＬＶ７→６　ＡＴＫ２５００→２７００

「「「「「「シンクロ召喚！？」」」」」」

あ～これ説明しないといけないよな～

「シンクロ召喚ってのはな…チューナーモンスター１体とそれ以外

の自分のモンスター1体以上でチューナーのレベル＋それ以外のモンスターのレベルの合計と同じレベルのモンスターを融合デッキから召喚する融合を使わない融合みたいなもんだ。」

「はぁ……」

「ま、分からなくても良いや、説明めんどくさいし…グングニールの効果発動！1ターンに1度、手札を2枚まで墓地へ捨てて、捨てた数だけ相手フィールド上に存在するカードを選択して、選択したカードを破壊する！俺は手札1枚を捨ててその伏せカードを破壊！」

グングニールが口から冷気を吐きだすとジュンコの伏せカードが凍り、砕け散った

「なんて反則能力！」

しらんわ。こんなのダークダイブボンバーとかに比べればまだいい方だと思うぞ…

「グングニールでダイレクトアタック！『神槍・スピア・ザ・グングニル』！！」

「東方っスか！？」

なぜあのアホが東方ネタを知ってるかはしらないが、グングニールは口から赤いレーザーみたいなブレスが飛んでいった

「きゃあああ！！」

ジュンコ　ＬＰ４０００→１３００

このまま一気に行こう。

「さらにメインフェイズ２に移り、手札から『二重召喚（デュアルサモン）』を発動！このターン、俺はもう一度通常召喚が行える。グングニールを生贄にしてアトランティスの効果でレベル６になった『氷結界の虎将ガンダーラ』を召喚！」

氷結界の虎将　ガンダーラ　ＬＶ７→６　ＡＴＫ２７００→２９００

「わざわざあのモンスターを生贄にしてまで？何考えてるのよ！？」

今わかるって…

「俺はこれでターンエンド。このときガンダーラの効果発動！1ターンに1度、墓地に存在する『氷結界の虎将　ガンダーラ』以外の『氷結界』と名の付くモンスター1体を特殊召喚できる！」

「そんな！なんてインチキ！？」

インチキじゃねぇよ…

（GXの世界なら十分インチキですｂｙ作者）

「ガンダーラの効果で再びグングニールを特殊召喚！」

俺の場に再びグングニールが現れる

凰雅　ＬＰ４０００　手札１

モンスター　氷結界の龍　グングニール　氷結界の虎将　ガンダーラ

魔法・罠　なし

「くぅ…私のターン！」

向こうはモンスターも伏せカードもなし…このまま押し切れるか？

「私は『マーメイドナイト』を守備表示で召喚！」

マーメイドナイト　ＬＶ４→３　ＤＥＦ７００→９００

この世界って表側守備表示で出せるのがいいな…

「さらにカードを３枚伏せて、ターンエンド！」

ジュンコ　ＬＰ１３００　手札１

モンスター　マーメイドナイト

魔法・罠　伏せ３枚

「俺のターン！」

どうすっかな…今のドローで手札は２枚、相手の伏せは３枚…選ぶのミスったらヤバいな……

「グングニールの効果発動！手札を２枚捨てて、左右の伏せカード

を破壊する！」

グングニールのブレスで2枚のカードが凍り、砕けた

破壊されたカード　『和睦の使者』　『サルベージ』

チッ！1枚はブラフカードか！？

どうする？待つか？いや、ここで待っても相手に時間を与えるだけか……

「バトル！グングニールでマーメイドナイトに攻撃！『神槍・スピア・ザ・グングニル』！」

グングニールの赤いレーザがマーメイドナイトを貫き、爆発した

「続けてガンダーラで攻撃！」

ガンダーラがジュンコに殴りかかる

「そうはいかないわ！罠（トラップ）発動！『炸裂装甲（リアクティブアーマー）』！攻撃してきたモンスター1体を破壊するわ！」

その瞬間、ガンダーラが爆発し、消えた

「これでモンスターは復活しないわ！」

「面倒な…ターンエンド！」

凰雅　ＬＰ４０００　手札０

モンスター　氷結界の龍　グングニール

魔法・罠　なし

「私のターン！」

「……くっ！私は墓地の『マーメイドナイト』を除外して『水の精霊アクエリア』を守備表示で特殊召喚！…ターンエンドよ…」

水の精霊アクエリア　ＬＶ４→３　ＤＥＦ１２００→１４００

ジュンコ　ＬＰ１３００　手札１

モンスター　水の精霊アクエリア

魔法・罠　なし

「俺のターン！」

「あんたのスタンバイフェイズにアクエリアの効果発動！あんたのその反則モンスターの表示形式を変更するわ！」

氷結界の龍　グングニール　ＡＴＫ２７００→ＤＥＦ１９００

「構わない！手札から『強欲な壺』を発動！カードを２枚ドロー！」

「そこでドローカードを引く！？」

うるさいぞ明日香引いたものは仕方が無いだろ

「さらにグングニールの効果発動！手札を１枚捨て、アクエリアを破壊！」

アクエリアが凍って粉々に砕け散る

「でも、そのモンスターはこのターン攻撃できないわ！」

「誰がグングニールで攻撃するなんて言った？手札から『憑依装着ーエリア』を召喚！」

《……最後は私…》

なんかものすごく張り切ってるエリアが出てきた……

憑依装着ーエリア　ＡＴＫ１８５０→２０５０

「そんな……」

「エリアでダイレクトアタック！」

《エ〇ーナル〇ォース〇リザード……》

最近好きだねその技…

「きゃあああああ！！！」

ジュンコ　ＬＰ１３００→—７５０

こうして翔(アホ)が原因の決闘は十代と俺のストレート２連勝で終わった…

ターン5「これがシンクロってやつ？」（後書き）

エリア「……ぶい♪」

マナ「エリアちゃん大活躍だね～」

凰雅「作者は？」

マハード「前書きでエリアにやられてからまだ復活していません」

凰雅「じゃあ俺達だけでやるか、まずは感想のお礼から」

マハード「混沌の魔法使いさま、感想ありがとうございます」

凰雅「しかし、エリアに頼まれてデッキを弄ったが良く回ったな」

マナ「本当は純粋な氷結界のデッキだっけ？」

凰雅「ああ、それをエリアに「私も入れて」と言ってきたからこんなデッキになった」

エリア「ちなみに私のメインデッキでもある……ちょっと違うけど…」

マナ「良いな～凰雅！今度は私達を使ってね♪」

凰雅「作者に言え。」

マハード「ここで読者のみなさんにお知らせです。」

エリア「皆さまに凰雅の元に来る精霊を募集…この作品の感想のところに応募する精霊のなまえ、マナやマハードのようにカード名ではない名前（↑これはお好みで）、性格を書いて送って来てね……待ってます」

マナ「次回は？」

マハード「決闘後の会話と凰雅殿に精霊が増える話だと作者は言っていました」

凰雅「また気苦労が増えるのか…」

エリア「マスタ…頑張れ…」

マナ「それじゃあ皆さん！」

マハード「次回も見ていってください。」

ターン5，5『簡単な解説ってやつ？』

マナ「凰雅！これって何？」

凰雅「これの前の話『これがシンクロってやつ？』で俺が使ったデッキのレシピとデュエルの簡単な解説をここでする。今後デュエルの話の後に大抵、こんな感じのおまけを挟むらしい」

マナ「へ～じゃあ早速レシピからいってみよう！」

凰雅「ちなみにＴＦ（タッグ・フォース）オリジナルは後ろの方に【ＴＦ】と書いてあります」

デッキレシピ

上級

・氷結界の虎将　グルナード

・氷結界の虎将　ガンダーラ×２

・海竜ーダイダロス

下級

・氷結界の番人プリズド×2
・氷結界の軍師
・氷結界の舞姫×2
・氷結界の水影×2
・氷結界の武士×2
・水霊使いエリア×2
・憑依装着ーエリア
・デブリドラゴン×2
・スノーマンイーター
・フィッシュボーグーガンナー×2

魔法

・伝説の都　アトランティス×3
・氷結界の三方陣
・氷結界の紋章×2
・サイクロン

・貪欲な壺
・強欲なウツボ
・強欲な壺

罠

・フローラル・シールド×２【ＴＦ】
・リミット・リバース×２
・聖なるバリア－ミラーフォース－
・王宮のお触れ×２
・ダメージ・コンデンサー
・激流葬
・神の宣告
・和睦の使者

計４２

エキストラ

・氷結界の龍　ブリューナク
・氷結界の虎王ドゥローレン
・氷結界の龍　グングニール×２
・氷結界の龍　トリシューラ×３
・ブラック・ローズ・ドラゴン
・アームズ・エイド×２
計１０

凰雅「こんな感じだな…エリアが混じったから純粋な氷結界のデッキとは言わないが…基本的な回し方は氷結界のモンスターを中心で回して行く感じだな。デブリがあるから墓地からエリアを持って来てシンクロが早いかな？」

マナ「他は？」

凰雅「あとは本編でやった通りアトランティスでレベルが下がったガンダーラを呼んで、墓地の氷結界を展開していくとか、正規の方法で特殊召喚した憑依装着ーエリアにアームズ・エイドをつけて殴るってやり方もある」

マナ「へ～～じゃあ次は今回の決闘を振り返ってみよう！」

凰雅「と言っても使ってるカードの世代が違うから結構一方的な場面が多いな」

マナ「そうだね～ところで最期の方でジュンコさんが手札１枚残してたけどなんで？」

凰雅「そうだな、アクエリアは特殊召喚だから手札のカードが下級モンスターなら壁に出来ただろうし、魔法でも伏せてブラフにすることができたはずだ。さらに手札のカードがダイダロスだったら……」

マナ「だったら？」

凰雅「効果でフィールドをリセットされてこっちがヤバかった…」

マナ「なるほど～」

凰雅「多分最後の１枚はレベル８のゴギガ・ガガギゴだったと思うぞ」

マナ「あのカードはアトランティスがあってもレベル7だもんね～」

凰雅「まあこんな感じかな……」

マナ「じゃあ今回はこの辺で！」

凰雅・マナ「「またねー！」」

マナ「感想待ってま～す！！」

ターン6・・・「新しい精霊ってやつ？」（前書き）

蒼影「凰雅の精霊が増えるよー」

凰雅「気苦労がまた増える…ｏｒｚ」

蒼影「それではどうぞ！」

ターン6・・・「新しい精霊ってやつ？」

～凰雅ｓｉｄｅ～

明日香達との決闘も終わり、翔と言う名のアホも返してもらった

「い、痛いっス！凰雅君！どうして僕の頭をグリグリしているんスか！？」

今俺はアホの頭を拳でグリグリしている

「やかましい。元はと言えばお前がこんなところにホイホイ来なければこんなことにはならなかったんだよ！俺の貴重な睡眠時間を削りやがって……」

「そんな～～僕はただラブレターの……」

「いいわけすんな！」

「ぎゃあああああああ！！」

・・・・・・・・

・・・・

・・

・

「と言う訳で俺達は帰るからな？」

「え、ええ…わかったわ。」

「よし…帰るぞ、十代。」

「お、おう…でも翔は大丈夫なのか？」

十代が俺の足元を見ながら言う

俺の足元には翔がぐったりした様子で倒れている

「大丈夫だ…ほら翔、行くぞ。」

「酷いっス……」

そのまま翔の首根っこを掴んで女子寮を後にした

帰り？当然俺の代りに翔にボートを漕がせたよ？当然じゃないか…

・・・・・・・・・

・・・・・

・・

・

～明日香ｓｉｄｅ～

「くやしい～～！！あんなのマグレに決まってるのに～～！！」

凰雅達が帰った後ジュンコが地団太を踏みながらそう叫んでいた…

全く周りに迷惑でしょう……

「ジュンコさん、はしたないですよ…」

ももえがジュンコを諌めているけどあんまり効果は無いみたい…

けど…凰雅の今回の決闘…前の決闘でも知らないカードを使っていたけど、今回はシンクロ召喚なんて言う知らない召喚方法まで使っていた…

「いつか戦ってみるべきよね……」

「流石明日香さん！そうこなっくちゃ！」

「は？」

急にジュンコが私にそう言った

「は？って明日香さんがあのいけ好かない奴と今度決闘するんでしょう？」

「私も見てみたいですわ！」

「え？…え？」

私の知らない所で勝手に話が進んでる！？

「ち、ちょっと…」

「見てなさいよ～！え～っと…ももえ、あいつの名前なって言ったっけ？」

「確か…如月凰雅ですわ！ほら！入学試験で先生を相手にワンターン・キルを決めた。」

「それもマグレに決まってるわ！如月凰雅！首を洗って待ってなさい！」

勝手に私と凰雅の決闘が決まってる！？

ま、いっか…（↑考えるのを諦めた）

とりあえず、凰雅とは放課後にでも決闘を挑みましょ…

いつの放課後かは決めてないけど……

・・・・・・・・・

・・・・・
・・
・

～凰雅ｓｉｄｅ～

…勝手に何かが決まった気がする…

十代達と別れ、ようやく自分の部屋の前までたどり着いた…

とりあえず、ボートを漕いだり決闘したりして汗かいたからまたシャワーの浴びなおしかな…

そう思いながら部屋を開けると……

「あ！凰雅、お帰り～！」

マナがいつも通り明るい声で…

「凰雅殿、大丈夫でしたか？」

マハードが気遣いの言葉を…

「マスタ…お帰り…」

エリアは眠たそうになりながらも…

「凰雅、どうだった？…」

ユベルも若干眠そうな顔で…

出迎えの言葉をかけてくれた。

皆起きて俺の帰りを待っているとは思わなかったので嬉しかった…

のだが……

「こいつら誰だ？」

俺が部屋の真ん中を指差して聞いた

「あら？あなたが呼び出したのに、随分な言い草ね…」

「この人が私達のマスターになる人なの？」

「そうみたいですね…」

そこには少女が3人いた…

そのうち2人はすぐに正体はわかった

白を基調とした色の服を着てピンクの髪を縦ロールにして、頭に羊のような形の帽子？をかぶってにこにこと笑う少女は言わずもがな『白魔導師ピケル』。

ピケルとは逆に黒を基調とした服にストレートの金色の長髪、頭にはウサギの様な帽子をかぶってクールな表情で俺を見る『黒魔導師クラン』。

だが、もう一人が分からない…

見た目は完全にどこかの紅い館のおぜうさまなんだが…微妙に違う…

まず、服はおぜうさまの服そのものなのだが、色が本来のおぜうさまは白いと赤の服に対し、この少女は白と薄い青の服だ。

一番違うと思ったのは背に生えている羽だ。

本来のおぜうさまはコウモリのような羽に対してこの少女の羽はどこかの？のような氷の羽が生えていた…

……本当に誰？

「私の事がわからないの？さっき決闘で散々私を使ったじゃない？」

さっきの決闘？

さっきの決闘で使用頻度が高かったのは……まさか！？

「お前…もしかしてグングニールか！？」

「やっと気付いたの？」

「お前、龍のはずだろ…なんでそんな姿なんだ…？」

「あなたが私の攻撃名を勝手に変えたからよ…ま、この姿は気に入ったけどね？」

……まさかネタに走ったからとは完全に予想していなかった……

「さっきそこのパソコンでこの姿の元を知ったからこれからは私の事はレミリアかレミィって呼んでね？」

「頭が痛くなってきた…」

「ま、何にせよ、これからよろしくね…凰雅。」

そう言ってグングニール改めレミリアが右手を差し出してきた

「あぁ…これからよろしく…」

俺も右手を出してお互いに握手した

「じゃあ今度は私の番〜！」

「ちょっと待ちなさいピケル。次は僕の番です！」

するとピケルとクランが我先にと俺に自己紹介をしようと詰め寄ってきた

「待て、今日はもう遅い…明日にしよう。幸い明日は日曜で休みだ。」

俺がピケル達を止めながら時計を指差す。先程の決闘騒ぎの所為で

既に１２時を回っている
ちなみにデュエルアカデミアは授業は土曜までで、日曜は休みだ。

「え～…」

ピケルは不満気の様だ

「わかりました。」

クランは素直に引き下がったようだ

「そう言う訳で自己紹介は明日だ。ほれ、皆布団敷いて寝ろ」

そう言いながら俺はすでに敷いてある自分の布団に入る

「む～～…じゃあ私、お兄ちゃんと一緒に寝る！」

ピケルが訳のわからない事を言って俺の布団に入ろうとする。

っていうかお兄ちゃんって俺の事か？

「ズルイです！僕もお兄様と一緒に寝たいです！」

クラン、お前もか…

2人が俺の布団に入ろうとお互いに睨み合っていると…

「マスターが寝れない…あっちで寝て。」

「「あ～～～！！？」」

いつの間にかエリアが俺の布団に入っていた…本当にいつの間に入った？

「「グスン……（泣き）」」

結局、ピケルとクランは一緒に同じ布団で寝たようだ…

レミリアはマハードに出してもらった布団に一人で寝たようだった…

・・・・・・・・・

・・・・・
・・・
・

・・・翌朝・・・

「皆さん、改めてはじめまして。僕は黒魔導師クランです。」

「白魔導師のピケルで～す！よろしくね！」

「氷結界の龍のグングニールよ。この姿の時はレミリアって呼んで。」

凰雅の部屋のテーブルで凰雅と精霊たちがお互いに自己紹介をしていた

「ブラックマジシャンガールのマナです！よろしくね？」

「マナの師匠のマハードです。よろしく」

「…エリア……よろしく」

「僕はユベル。よろしく」

互い互いに紹介も済んだ所でピケルが言った。

「お兄ちゃん！私にも名前を付けて！」

「名前？マナやマハードみたいな愛称の事か？」

「そう、それ！お願い～」

ピケルが上目づかいでお願いしてくる。そこにクランも…

「あの、その…僕にも付けてください。お兄様…」

同じく上目遣いでお願いしてきた…大抵の男はこれだけで何でも言う事聞きそうだな…

「わかった、わかった。そうだな……」

しかし俺はこういうのは苦手なんだよなぁ…

「じゃあピケルはメイ。クランはクゥリィで。」

「やったぁ！」

「ありがとうございます。お兄様。」

ピケル改めメイとクラン改めクゥリィがお互いに喜びあっていた

「エリアちゃん。エリアちゃんはいいの？名前付けてもらわなくて…」

「今はいい…いつか凰雅につけてもらう…」

「そっか…」

マナとエリアがそのような会話をしていたのを俺は隣で聞いていた

その時……

ドンドンドン！！

「凰雅～！居るか～？」

決闘バカ（十代）がやってきた

「十代もタイミングが悪いよね？こんなときに来なくてもいいのにさ」

ユベルがため息をつきながらドアを見ている

「……とりあえず出てくる…」

俺はドアを開けた

「なんだ十代？何か用か？」

「凰雅！決闘しようぜ！」

……この決闘バカは……もう怒りや苛立ちを通り越して呆れが来そうだ

「…わかった。寮の前で待ってろ、今デッキをとってくる」

いっそのこと1回決闘してしまおう……

「ホントか!?よっしゃあ!じゃあ待ってるぜ!」

そう言って十代は走っていった

俺は十代の決闘バカっぷりに頭を抱えながら部屋に戻った

ターン6・・・「新しい精霊ってやつ？」（後書き）

蒼影「と言う訳で今回から凰雅の精霊になったレミリアとメイとクゥリィです。」

レミリア「よろしくお願いするわ。」

メイ「よっろしく～！」

クゥリィ「よろしくお願いします。」

蒼影「まずは感想のお礼から」

レミリア「戎鴛さま。感想ありがとう。嬉しいわ」

メイ「ありがと～！」

クゥリィ「ありがとうございます。」

蒼影「ピケルとクランのアイデアはドライバーさまから頂きました。愛称は私が考えたのですが…」

メイ「ありがとう！ドライバーさん！」

蒼影「ただ、ピケルとクランの凰雅の呼び方はドライバーさまのアイデアではピケルが『お兄様』、クランが『兄さん』だったのですが、本編の呼び方に変更しました。」

レミリア「わたしは？」

蒼影「前に東方ネタを使ったとき思いついたので出した。見た目のイメージは東方のレミリアの服の紅い部分を薄い青にして、背中の羽を同じく東方のチルノの羽のような感じです」

レミリア「そう…ここで読者のみなさんにお知らせがあるわ。」

メイ「みんなにお兄ちゃんの元に来る精霊を募集しま～す！…この作品の感想のところに応募する精霊のなまえ、マナやマハードのようにカード名ではない名前（↑これはお好みで）、性格を書いて送って来てね！待ってま～す！」

クゥリィ「次回はお兄様が十代さんと決闘します。」

蒼影「その前に人物の設定の所にレミリア達を追加しないと…」

レミリア「それでは…」

蒼影「次回もお楽しみに！」

ターン7「十代と決闘ってやつ？」（前書き）

蒼影「久々の更新だな…」

凰雅「今まで何やってたんだ？」

蒼影「大学が始まって描く暇がなかった」

凰雅「今更じゃね？」

蒼影「俺の通ってる大学石巻にあるんだぞ？」

凰雅「納得した」

蒼影「それではどうぞ！」

ターン7「十代と決闘ってやつ？」

～凰雅ｓｉｄｅ～

デッキを持ってレッド寮の前まで来るとギャラリーが集まっていた

ギャラリーの中には三沢もいた

「おい、三沢…なんでこんなに人が集まってるんだ？」

「十代が明日凰雅に決闘を申し込むって昨日大声で言っていたからな、気になった生徒がここに集まっているんだ」

俺は頭を悩ませた、まさかこんな事態になっているとは…

「まぁいいや…とりあえずさっさと終わらせよう…せっかくの休日だ。ゆっくり休みたいんだ…」

「楽しい決闘にしようぜ！」

「はいはい…とりあえず螺子伏せてやるから…」

「「デュエル！」」

十代　ＬＰ４０００

凰雅　ＬＰ４０００

「先行は俺が貰うぜ！ドロー！」

さて…どうするか…十代は主人公補正とディスティニードロー持ちだし…

「俺は『Ｅ・ＨＥＲＯ　クレイマン』を守備表示で召喚！カードを２枚伏せて、ターンエンド！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　クレイマン　ＤＥＦ２０００

十代　ＬＰ４０００　手札３枚

モンスター　『Ｅ・ＨＥＲＯ　クレイマン』

魔法・罠　セット２枚

「俺のターン、ドロー！」

手札は…まぁまぁだな、なんとかなるか？

「俺は手札からフィールド魔法『D・フィールド（ディフォーマー）』を発動。」

「なんだ？見たことないフィールドだな…」

「さらに永続魔法『つまずき』を発動して『D・ラジカッセン（ディフォーマー）』を召喚！」

俺の場に赤いロボットのようなモンスターが現れた

しかし次の瞬間ロボットが変形してラジカセになった

D・ラジカッセン　ATK1200↓DEF900

「なんでモンスターが守備になったんだ！？」

十代が驚きの表情で俺に聞いてくる

「三沢、説明してやってくれ…」

俺は三沢に説明を振った

「わかった。十代、凰雅のモンスターの表示形式が変わったのは『つまずき』の効果だ。」

「『つまずき』の効果？」

「『つまずき』がフィールドにある限り、フィールドに召喚されたモンスターは強制的に守備に変更されてしまうんだ。」

「ということは行動が1ターン遅れるってことか？」

「そう言う事だ…」

「説明が終わったところで『D・フィールド』の効果発動。」

すると『D・フィールド』に『1』とカウントが浮かび上がった

「なんだ？そのカウント？」

「『D・フィールド』はフィールドのモンスターの表示形式が変わるたびにDカウンター(ディフォーマー)が乗る。そしてDカウンター1つにつきフィールド上で表になっている『D(ディフォーマー)』と名の付くモンスターの攻撃力は300ポイントアップする。」

「つまり、表示形式を変える度にそのディフォーマーってやつが強くなっていくのか!?」

「まずいな…『つまずき』があるからモンスターを召喚するたびにカウンターが乗るのか…単純だが有効なコンボだ…」

三沢は顎に手を当てながら冷静に状況を分析している

「ターンエンド。」

さて…十代はどう攻めてくるのかな?

凰雅　LP4000　手札3枚

モンスター　『D・ラジカッセン』

魔法・罠　『つまずき』　『D・フィールド〈DC(ディフォーマーカウンター)・1〉』

「俺のターン！ドロー！」

「俺は、『Ｅ・ＨＥＲＯ　フェザーマン』を守備表示で召喚して、ターンエンドだ！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　フェザーマン　ＤＥＦ１０００

十代　ＬＰ４０００　手札３枚

モンスター　『Ｅ・ＨＥＲＯ　クレイマン』　『Ｅ・ＨＥＲＯ　フェザーマン』

魔法・罠　セット２枚

十代の奴、Ｄ・フィールドにカウンターを乗せないように最初から守備で出してくるな…

考えてやっているのか、直感でやっているのかは分からないが…

「俺のターン！」

「『Ｄ・ラジカッセン』を攻撃表示に変更し、さらに手札から『Ｄ・

ボードン』を攻撃表示で召喚する、さらに手札から装備魔法『ダブルツールD&C（ディーアンドシー）』をラジカッセンに装備！」

俺の場にスケボーのようなモンスターが現れ、すぐに完全にスケボーに変形し、そのあとラジカッセンが人型に変形し、その手にはドリルのような槍？とカッターが装着される。

D・フィールド〈DC・1↓2↓3〉

D・ラジカッセン　DEF900↓ATK1200↓2200↓3100

D・ボードン　ATK500↓DEF1800

「攻撃力3100ぅ！？」

翔がラジカッセンの攻撃力を見て驚いている、これで驚いていたらこの先やっていけないぞ？

「凰雅、その装備カードの効果を教えてくれないか？」

三沢も若干驚いた顔をしているが、すぐに冷静になり、俺にカード

効果の説明を振ってくる

「『ダブルツールD&C』は自分のターンと相手のターンで違う効果を持っている。まず、自分のターンでは装備モンスターの攻撃力を１０００ポイント上げ、さらにバトルフェイズの間だけ攻撃対象のモンスターの効果を無効化できるんだ。相手ターンでは攻撃力は元に戻るが、相手はこのカードを装備したモンスターしか攻撃対象にできず、装備モンスターと戦闘をした相手モンスターをそのダメージステップ終了時に破壊する効果がある…」

「なんだって！？」

三沢もさすがに驚かざる得ないようだな

まぁ装備できる対象が限定されているがこのカード1枚で自分のターンでは『デーモンの斧』と『レインボー・ヴェール』、相手のターンでは『レアゴールド・アーマー』と『古代の機械掌』の効果を得るようなものだしな…

「そんなカード、卑怯じゃないんスか！？」

お前はそればっかりだな翔…

「そうでもないこのカードを装備できるのは自分の場の『パワーパ

ワー・ツール・ドラゴン』か『D（ディフォーマー）』と名のついたレベル4以上の機械族モンスターにしか装備できない。ちなみに現在LV5以上の『D（ディフォーマー）』は存在しない。それに、このカードは『自分の場』とフィールドを限定しているから装備モンスターのコントロールが相手に移ったりしたらこのカードは破壊されるんだよ。理解したか？納得したか？」

翔は説明を聞いて唸りながら頭から煙が出ていた…そうだった、こいつは十代以上の？だった…十代も煙が出てるし……

「さて、説明も終わったことだし、バトルと行こう！ラジカッセンでクレイマンに攻撃！」

ラジカッセンが手に持ったドリルでクレイマンを貫こうとする

「させないぜ！罠発動！『ヒーローバリア』を発動！自分のフィールドに『HERO』が存在するとき、相手モンスターの攻撃を1度だけ無効にする！」

ドリルはクレイマンの前に現れたバリアに阻まれるが…

「『D・ラジカッセン』の効果は発動！このカードが攻撃表示のとき、このカードは1度のバトルフェイズ中に2回攻撃する事ができる！」

「なに！？」

再びラジカッセンがドリルを突き出すと、今度はクレイマンを難なく破壊で来た

「くそ！それならリバースカードオープン！『ヒーロー・シグナル』！自分のモンスターが戦闘で破壊されたとき、デッキ、手札からＬＶ４いかの『Ｅ・ＨＥＲＯ』と名のつくモンスターを特殊召喚できる！俺はデッキから『Ｅ・ＨＥＲＯ　バーストレディ』を守備表示で特殊召喚！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　バーストレディ　ＤＥＦ８００

「…ターンエンド」

Ｄ・ラジカッセン　ＡＴＫ３１００→２１００

凰雅　ＬＰ４０００　手札２枚

モンスター　『Ｄ・ラジカッセン』　『Ｄ・ボードン』

魔法・罠　『つまずき』　『Ｄ・フィールド〈ＤＣ３〉』　『ダブ

ルツールD&C〈ラジカッセンに装備〉』

「くっ！俺のターン、ドロー！」

「俺は手札から『天使の施し』を発動！デッキからカードを3枚ドロー！そのあと手札からカードを2枚捨てる！」

おいおい…俺が言える立場じゃないけど、そこで施しを引くか？

「俺は手札からフィールド魔法『大嵐』を発動！」

「ゲッ！」

フィールドに風が吹き乱れ、フィールドの魔法・罠が吹き飛んでいく

「これで凰雅のモンスターの攻撃力は元に戻るぜ！」

D・ラジカッセン　ATK2100→1200

くそったれが！『D・フィールド』を破壊された揚句、『つまずき』まで！おまけに墓地にディフォーマーがいないから『D・フィール

ド』のもう１つの効果が発動しない！

やってくれるな！十代！

「さらに手札の『融合』を発動！フィールドのフェザーマンとバーストレディを融合！来い！『Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン』！」

「やったぁ！アニキのフェイバリットカードだ！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン　ＡＴＫ２１００

「さらに手札の『ミラクル・フュージョン』を発動！墓地の『Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン』と『Ｅ・ＨＥＲＯ　エッジマン』を融合！」

いつの間にスパークマンとエッジマンを墓地に落としていた？……さっきの施しかぁ！？この……ご都合主義の塊がぁ！！

「来い、『Ｅ・ＨＥＲＯ　プラズマヴァイスマン』！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　プラズマヴァイスマン　ＡＴＫ２６００

「一気に上級ヒーローが2体！アニキが有利になった！」

「いっけぇ！フレイム・ウィングマンでラジカッセンに攻撃！」

「このとき、手札の『ガジェット・ドライバー』を墓地へ捨てて効果発動！自分フィールド上に表側表示で存在する「Ｄ（ディフォーマー）を指定して表示形式を変更する！俺はラジカッセンを指定して表示形式を変更！」

Ｄ・ラジカッセン　ＡＴＫ１２００→ＤＥＦ９００

「構うものか！そのまま攻撃を続行！」

「ラジカッセンの効果発動！このカードが守備表示のとき、相手モンスターの攻撃を１度だけ無効にする！」

「だったら、プラズマヴァイスマンでラジカッセンに攻撃！プラズマヴァイスマンは守備モンスターを攻撃したとき、攻撃力がその守備力を超えていれば貫通ダメージを与えるぜ！」

「だが、ボードンの効果発動！このカードが守備表示のとき、このカード以外の『Ｄ（ディフォーマー）』と名のつくモンスターは戦闘では破壊されない！」

「けど、ダメージは受けてもらうぜ！」

「ちっ！！」

凰雅　ＬＰ４０００→２３００

「ターンエンドだ！」

十代　ＬＰ４０００　手札１枚

モンスター　『Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン』　『Ｅ・ＨＥＲＯ　プラズマヴァイスマン』

魔法・罠　なし

「俺の、ターン！」

「俺は手札からチューナーモンスター『Ｄ（ディフォーマー）・スコープン』を守備表示で召喚！」

Ｄ・スコープン　ＬＶ３→４　ＤＥＦ１４００

「チューナー？見たことないモンスターだ」

「まさか、また！」

「来るのか！？シンクロ召喚が！」

あんまりシンクロ使いたくないんだよなぁ…目立つから……でもこのご都合主義の塊に勝つにはこれぐらいしないとな！

「レベル３の『Ｄ・ボードン』にレベル４の『Ｄ・スコープン』をチューニング！」

ＬＶ３＋ＬＶ４＝ＬＶ７

ボードンが３つの光る星に変化し４つの輪に変化したスコープンの中を通る

「星と星が集いし時、機械仕掛けの竜が今ここに舞い降りる！その力で道を開け！シンクロ召喚！」

そして辺りが光に包まれた

「突き崩せ！『パワー・ツール・ドラゴン』！」

そして俺の場に黄色いボディに右手に大型のマイナスドライバー、左手は左手自体がショベルのような形をした機械の体の竜が現れた

パワー・ツール・ドラゴン　ＡＴＫ２３００

「シンクロ召喚！？何だこれは！？」

三沢がこれ以上ないってくらい驚いている

「三沢、説明は後でしてやる、『パワー・ツール・ドラゴン』の効果発動！１ターンに１度、自分のデッキから装備魔法カードを３枚選択し、相手にその中からランダムに１枚選択させる。そして、相手が選択したカード１枚を自分の手札に加え、残りのカードをデッキに戻してシャッフルする！」

俺はデッキからカードを３枚抜き出し十代に裏向きで見せる。ちなみに俺がデッキから選択したのは『団結の力』、『ダブルツールＤ＆Ｃ』、『デーモンの斧』の３枚だ

「さあ、十代！3枚のうち1枚を選べ！」

「じゃあ、俺は真ん中のカードを選ぶぜ！」

十代に指定されたカードを手札に加え、残りをデッキに戻した

「そして今手札に加えた『団結の力』を『パワー・ツール・ドラゴン』に装備！」

パワー・ツール・ドラゴン　ＡＴＫ２３００→３９００

「すごいな、攻撃力３９００か…さすが凰雅と言ったところか…と言うか凰雅、口調変わってきてないか？」

「これが俺の素だ。最近はあんまり素でしゃべってなかったからな…」

こんなディステニードロー持ちとやっていたら口調も崩れるわ…

「バトル！パワー・ツールでプラズマヴァイスマンを攻撃！クラフティ・ブレイク！」

俺の掛け声とともにパワー・ツール・ドラゴンの右手のドライバーが高速で回転しプラズヴァイスマンを貫いた

「うわっ！」

十代　ＬＰ４０００→２７００

「さらに手札から永続魔法『リサイクル』を発動して、ターンエンド」

凰雅　ＬＰ２３００　手札０枚

モンスター　『パワー・ツール・ドラゴン』　『Ｄ・ラジカッセン』

魔法・罠　『団結の力〈パワー・ツール・ドラゴンに装備〉』　『リサイクル』

「俺のターン！ドロー！」

カード引いた十代の顔が歪む、逆転のカードは来なかったようだ…

「俺はフレイム・ウィングマンを守備表示にしてカードを１枚伏せ

てターンエンド。」

E・HERO　フレイム・ウィングマン　ATK2100→DEF1200

十代　LP2700　手札1枚

モンスター　『E・HERO　フレイム・ウィングマン』

魔法・罠　セット1枚

「俺のターン！」

「俺のスタンバイフェイズに『リサイクル』の効果発動！ライフを300支払うごとに自分の墓地にあるモンスター以外のカードを1枚、デッキの一番下に戻す」

「？なんか、意味あるのか？」

「あるから使うんだろうが…俺はライフを支払い、墓地の『ダブルツールD&C』をデッキの下に戻す」

凰雅　LP2300→2000

「そして、『パワー・ツール・ドラゴン』の効果を発動！」

再びデッキから3枚抜き出し十代に裏向きのまま見せる

「…じゃあ今度は一番右だ！」

十代に指定されたカードを手札に加える……十代…運がないな…あの強運はドローのみなのか？

「俺は今手札に加えた『メテオ・ストライク』を『パワー・ツール・ドラゴン』に装備！」

「あれ？攻撃力が変わってないぞ？」

「十代、あれは装備モンスターに貫通効果を付加させる装備魔法だ。さっき十代が使ったプラズマヴァイスマンみたいに守備モンスターを攻撃したとき、守備力を攻撃力が肥えていればその分だけ貫通ダメージを与えるんだ」

三沢説明ご苦労さん…

「て言うことは…俺のフレイム・ウィングマンを攻撃されたら貫通ダメージを受けるってことか！？」

「その通りだ、さらにラジカッセンを攻撃表示に変更、バトル！『パワー・ツール・ドラゴン』でフレイム・ウィングマンを攻撃！ぶち抜け！クラフティ・ブレイク！」

D・ラジカッセン　DEF900A→TK1200

パワー・ツールのドライバーがフレイム・ウィングマンを貫…

「罠発動、『攻撃の無力化』！バトルを無効にしてバトルフェイズを終了させる！」

…かなかった……まさかの無力化…ミラフォじゃないのかよ…

「くそ！ターンエンド」

凰雅　LP2000　手札1枚

モンスター　『パワー・ツール・ドラゴン』　『D・ラジカッセン』

魔法・罠　『団結の力〈パワー・ツール・ドラゴンに装備〉』　『メテオストライク〈パワー・ツール・ドラゴンに装備〉』　『リサイクル』

「俺のターン！」

あぁ…終わったな俺…

『フレイム・ウィングマンを攻撃表示に変更してラジカッセンに攻撃！行けぇ！フレイムシュート！』

「ちぃ！」

凰雅　ＬＰ２０００→１１００

「そしてフレイム・ウィングマンの効果発動！このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える！」

「あぁ…俺の負けかよ…」

「楽しい決闘だったぜ！凰雅！」

「まぁ…同感だ…」

そして俺はフレイム・ウィングマンの出した炎に包まれた

凰雅　LP1100↓―100

・・・・・・・・・・・・

・・・・・・

・・・

・

「ガッチャ！楽しいデュエルだったぜ！」

「そうかい？ならよかった、じゃ、俺は帰るから…あ、三沢、この後空いているな部屋に来い、シンクロ召喚について「見つけたわよ！如月凰雅！！」……やっぱり後にしよう、厄介そうなのが来た…」

俺がそう呟いて声のほうを向くとそこには昨日のブルー女子3人組がいた

「……明日香、何しに来たんだ？わざわざブルー寮から遠いここ（レッド寮）まで」

「それは…「あんたを倒しにきたにきまってるじゃない！！」…昨日からこんな調子なのよ…」

「つまりリベンジか？」

「今日はあたしじゃないわ！あんたがデュエルするのは明日香さまよ！」

頭が痛くなってきた……

「……本当か？明日香…」

「まぁそうね、私もあなたと戦ってみたかったし…」

そう言って明日香がデュエルディスクを構えた

「はぁ…わかったよ…1回だけな…俺は寝足りないんだ…」

そう言いながら俺はデッキを変える

「？さっきのデッキを使わないの？」

「さっきは十代に負けたからな、２連敗とかしたくないし、久々に主力デッキを使う」

「つまり、今まで本気じゃなかったということ？」

「そうじゃない、デッキのほうが今まではネタデッキ寄りだったからな…今回はガチだ」

それを聞いた明日香は

「それは楽しみね」

笑みを浮かべながらそう言った

「「デュエル！！」」

ターン7「十代と決闘ってやつ？」（後書き）

レミリア「みなさんこんにちわ、凰雅の精霊の中でたぶん3番目に偉いであろうレミリアよ」

マナ「誰がそんなこと決めたの！？」

レミリア「私に決まっているじゃない。ちなみに1番がマハードで2番目はエリアよ…」

マナ「お師匠様はともかくなんでエリアちゃん？」

レミリア「この前、エリアに黙っておやつのドーナツを食べたら凍らされたわ…氷結界の龍であるこの私がよ…それ以来、エリアのおやつは食べないようにしたの…」

マナ「あ、あはははは……じゃあここで感想の御礼をしよう！」

レミリア「瀬河ナツさま、マスク野郎さま感想ありがとうございます」

マナ「ありがとう～！」

レミリア「さて、この後どうしましょうか？」

マナ「え？普通に終わりにしてもいいんじゃないの？」

レミリア「いえ、それじゃつまらないと思ってね…他の作者さんならここでコラボの募集とかしちゃうんじゃないかと思って…」

マナ「不定期更新のこの作者さんがコラボなんて無理だと思うんだけどな～」

レミリア「あなたも結構笑顔でひどいこと言うのね…まぁいいわ、次回は何のお話？私の華麗なサクセスストーリー？」

マナ「いやいや、明日香さんと凰雅の決闘でしょ？」

レミリア「そうだったわね。ついに凰雅のガチデッキが見れるのね…」

マナ「どんなデッキだろうね？」

レミリア「それでは今回はこの辺で」

マナ「次回もよろしくね！」

ターン7，5「今回の解説って奴？」

レミリア「さて、皆さん先ほどぶり、レミリアよ」

凰雅「凰雅です」

蒼影「作者の蒼影です」

凰雅「今回はこの3人で解説をやっていきます」

レミリア「まずは今回凰雅が使ったデッキレシピよ」

上級

・なし

下級

・ガジェット・ドライバー

・D・キャメラン×2

・D・クロックン×2
・D・スコープン×3
・D・ボードン×2
・D・マグネンU×2
・D・モバホン×2
・D・ラジオン×3
・D・ラジカッセン×3
・名工虎鉄×2

魔法

・大嵐
・ダブルツールD&C×2
・つまずき×2
・D・スピードユニット
・D・フィールド×3
・一角獣のホーン×2

・強欲な壺
・団結の力×２
・魔導師の力
・メテオ・ストライク
・Ｄ・コード
・デーモンの斧
・リサイクル

罠

・聖なるバリア－ミラーフォース－
・Ｄ・スクランブル
・Ｄ・バインド×２
・光の護封壁
・ブレンＤ

計４５

エキストラ

・パワー・ツール・ドラゴン×3

凰雅「といった感じだな」

レミリア「見事に上級モンスターがいないわね」

蒼影「基本はD・フィールドで強化されたディフォーマーでビートするから上級はいらないんだよね…」

凰雅「基本的な使い方は本編でやったとおりつまずきの効果で強制的に表示形式を変えながらD・フィールドのカウンターをためること、現実では表側で守備モンスターを出せないからすぐにカウンターは溜まる」

蒼影「ついでにパワー・ツールも出して押し切るのも有りだただ、装備カードが多めになってるから事故りやすい」

レミリア「でも結構変則的というかひねくれたデッキね…装備カードを少なくしてディフォーマー1色にしてしまえば良かったんじゃない？」

凰雅「もしくはディフォーマー抜いてヴァイロン入れたほうが回ったかもな」

蒼影「そこまでやったらガチになっちゃうじゃない？今回の話は凰雅が負けること前提なんだから」

レミリア「どういうこと？」

蒼影「全戦全勝の主人公ってどうなんだよって俺は思っている人間だからね…いくらガチで組んだデッキでも手札事故とかあるんだし？それに俺はデッキを考えるときソリティアっぽくならないようにしてるし…あくまで俺の主観だけど、あれは見ていて詰まんないからね」

凰雅「なるほど…」

蒼影「だから今回のデッキはどう回っても五分五分なデッキを組んだつもりだよ？」

レミリア「でも結局負けたのね回避する方法はなかったの？」

蒼影「今回の原因は凰雅が十代の伏せカード『攻撃反応型』…その

中でも炸裂装甲や聖なるバリアみたいな『破壊型』だと決めつけてしまって、ラジカッセンを攻撃表示にしたことだね。」

レミリア「実際伏せカードは無力化だったわね…」

凰雅「これは完全に俺のプレイミスだな…」

蒼影「あそこはラジカッセンは守備のまま攻撃でよかったんだよ、無力化だったらあのフィールドのまま十代のターンに移っていたし、仮に破壊型の罠でもパワー・ツールの効果で一応パワーツールは残っていたんだ。十代はバウンズ系や除外系は持ってなさそうだしね…」

レミリア「なるほどね…ところで凰雅の最後の手札はなんだったの？」

凰雅「D・スピードユニットだ。手札にディフォーマーが来なかったから使えなかったけどね…」

蒼影「伏せてブラフにするのも有りだけど十代は関係なく攻撃してきそうだ」

レミリア「そうね…」

蒼影「今回はこんなものかな…みなさん感想、ご指摘待ってます」

レミリア「何かいいことあったらいいわね？」

凰雅「『化物語』ネタかよ！？」

レミリア「いいじゃない、私はこの小説の締めはこれでいくことを提案するわ」

蒼影「まぁ、いいんじゃない？」

凰雅「いいのかよ！？」

レミリア「それでは改めて、何かいいことあったらいいわね？お相手はレミリアと…」

蒼影「蒼影と…」

凰雅「如月凰雅でした！」

ターン8・・・『これが凰雅のガチデッキってやつ？』（前書き）

マハード「みなさん、お待たせいたしました。久しぶりの更新です」

ユベル「今回は凰雅のガチデッキが出ます」

マハード「それではどうぞ」

ターン8・・・『これが凰雅のガチデッキってやつ？』

～明日香side～

いつの間にか決まってしまった凰雅との決闘が始まった

「私のターン！」

「私は『エトワール・サイバー』を召喚！カードを1枚伏せてターンエンド！」

エトワール・サイバー　ATK1200

明日香　LP4000　手札4枚

モンスター　エトワール・サイバー

魔法・罠　セット1枚

「俺のターン！」

「俺は『マジカル・コンダクター』を召喚！」

マジカル・コンダクター　ＡＴＫ１７００　ＭＣ（魔力カウンター）
・０

凰雅のフィールドに現れたのは翠色の服を着た長髪の女性

「こいつは魔法カードが発動されるたびに魔力カウンターを２つ乗せる効果がある。そして１ターンに一度、手札、墓地からこのカードから取り除いた魔力カウンターと同じ数のレベルのモンスターを特殊召喚できる」

「凰雅のデッキは魔力カウンターを使う魔法使い族のデッキか！？」

三沢君が凰雅のモンスターの効果を聞いて叫んだ

魔力カウンターを使うモンスターは魔法カードを使う度にカウンターを乗せ、そのカウンターを使って様々な効果を及ぼすシリーズのカード…レア度は結構高いはずなんだけど

「さらに手札からフィールド魔法、『魔法都市エンディミオン』を発動！」

凰雅が魔法を発動させると周りが大きな塔が立ち並ぶ都市になった

マジカル・コンダクター　ＭＣ・０→２

「凰雅、そのフィールド魔法はどういう効果なんだ？」

「効果は長いからその都度話す。とりあえずこのカードにも魔法カードを使う度、魔力カウンターが乗る」

魔力カウンターが乗るフィールド魔法？聞いたことないわ…

「さらに続けて永続魔法、『リサイクル』を発動、効果はさっき十代との決闘で使ったから説明は割愛するぞ」

マジカル・コンダクター　ＭＣ・２→４

エンディミオン　ＭＣ・０→１

「そして、マジカルコンダクターのモンスター効果発動。このカードから魔力カウンターを４つ取り除き、手札から『王立魔法図書館』を守備表示で特殊召喚」

王立魔法図書館　ＤＥＦ２０００　ＭＣ・０

マジカル・コンダクター　ＭＣ・４→０

１ターン目でここまで回せるものなの？

凰雅って運がいいわよね…

「さらに魔法カード『魔力掌握』を発動！このカードは自分の魔力カウンターを乗せることができるカードに魔力カウンターを１つ乗せるカード。さらにデッキから同名カードを１枚手札に加えてシャッフルする。俺は『王立魔法図書館』にカウンターを乗せる！そして、魔法を発動させたことにより、『マジカル・コンダクター』、『魔法都市エンディミオン』、『王立魔法図書館』にカウンターが乗る」

マジカル・コンダクター　ＭＣ・０→２

エンディミオン　ＭＣ・１→２

王立魔法図書館　ＭＣ０→１→２

「カードを１枚伏せ、ターンエンド」

凰雅　ＬＰ４０００　手札１枚

モンスター　マジカル・コンダクター（魔力カウンター2個）　王立魔法図書館（魔力カウンター2個）
魔法・罠　魔法都市エンディミオン（魔力カウンター2個）　リサイクル　セット1枚

「私のターン、ドロー！」

今引いたカードは『融合』…これで手札の『ブレード・スケーター』と場の『エトワール・サイバー』を融合して『サイバー・ブレイダー』を召喚すれば、一気に私が有利になる…

「私は手札から『融合』を発動するわ！手札の『ブレード・スケーター』とフィールドの『エトワール・サイバー』を融合！『サイバー・ブレイダー』を融合召喚！」

サイバー・ブレイダー　ＡＴＫ２１００

「『サイバーブレイダー』は相手のモンスターの数で効果が決まるわ！凰雅のモンスターは2体…よって、『サイバー・ブレイダー』の効果は攻撃力が倍になる効果よ！」

「明日香が魔法カードを使ったことで俺のモンスターにカウンターが乗る」

サイバー・ブレイダー　ＡＴＫ２１００→４２００
マジカル・コンダクター　ＭＣ・２→４
王立魔法図書館　ＭＣ・２→３
エンデュミオン　ＭＣ・２→３

「攻撃力４２００だって！？すげぇな！」

重大がはしゃいでいるけど、肝心の凰雅は顔色一つ変えない…

結構イラッとくるわね…

「バトルよ！『サイバー・ブレイダー』で『マジカル・コンダクター』を攻撃！グリッサード・スラッシュ！」

サイバー・ブレイダーが回転しながら凰雅のモンスターへ突撃していく…

通るかしら…？

「罠発動、『くず鉄のかかし』！相手のモンスターの攻撃を１度だ

け無効にする！」

サイバー・ブレイダーの攻撃は突然現れた鉄のかかしに阻まれてしまった…

「さらにこのカードは発動後、再び俺の魔法・罠ゾーンにセットされる」

「そんな！？何度も使える罠カードがあるなんて！？」

そんなの反則じゃないの！？

このままだと、凰雅のモンスターを破壊するには最低2回攻撃する必要があるじゃない！

「…私はカードを1枚伏せてターンエンドよ…」

明日香　ＬＰ４０００　手札２枚

モンスター　サイバー・ブレイダー

魔法・罠　セット２枚

「俺のターン、ドロー！俺のスタンバイフェイズに『リサイクル』の効果発動！ライフを３００払うことで墓地にある魔法か罠カード１枚をデッキの１番下に戻す！俺の墓地にある魔法・罠は『魔力掌握』のみだから、『魔力掌握』をデッキの１番下に戻す！」

凰雅　ＬＰ４０００→３７００

「ちょっと待て凰雅！ということは君はライフが続く限り、『魔力掌握』を使い続けることができるのか！？」

「どういうことっすか？」

三沢君が説明を始めた様ね…気になるから聞いてみましょう

「凰雅の説明だと『魔力掌握』はデッキから同じ『魔力掌握』を手札に加える効果がある…本来なら『魔力掌握』は３枚しか使えない…しかし、手札に１枚『魔力掌握』を残しておいて次のターンに『リサイクル』でデッキに戻すのを繰り返せば『リサイクル』のコストで払うライフが続く限り、凰雅は『魔力掌握』を使い続けることができるということだ。」

それって、凰雅のデッキは魔力カウンターがメインのデッキだから…まずいじゃない！？

「そして、『王立魔法図書館』の効果発動！このカードに乗っている魔力カウンターを３つ取り除くことで、デッキからカードを１枚ドローできる！ドロー！」

王立魔法図書館　ＭＣ・３→０

凰雅　手札３枚

あれ？ちょっと…まずくない？今頭に『ソリティアｋｔｋｒ』とか頭を過(よぎ)ったのだけど…

「さらに手札から『魔力掌握』を発動！『王立魔法図書館』にカウンターを乗せ、さらに魔法を発動させたことで魔力カウンターが乗る…」

王立魔法図書館　ＭＣ・０→１→２

マジカル・コンダクター　ＭＣ・４→６

エンデュミオン　３→４

「ここで、『魔法都市エンデュミオン』の効果の１つを説明するぞ、１ターンに１度、自分フィールド上に存在する魔力カウンターを取り除いて自分のカードの効果を発動する場合、代わりにこのカード

に乗っている魔力カウンターを取り除く事ができる！」

「ということはつまり…」

「『王立魔法図書館』の効果発動！このカードの代わりにエンデュミオンに乗っているカウンターを3つ取り除いてデッキからカードを1枚ドロー！」

エンデュミオン　MC・4→1

凰雅　手札4枚

…おかしいわね、このターン開始の時には凰雅の手札は2枚だったはず…それが1分足らずで倍の枚数になるものだったかしら？

「さらに手札から『天使の施し』を発動、デッキから3枚カードをドローし、そのあと2枚手札からカードを墓地に送る。魔法カードを使ったから魔力カウンターが乗る」

王立魔法図書館　MC・2→3

マジカル・コンダクター　MC・6→8

エンデュミオン　MC・1→2

凰雅　手札５枚

「さらに『王立魔法図書館』の効果で１枚ドロー！」

王立魔法図書館　ＭＣ・３→０

凰雅　手札６枚

凰雅はどれだけドローすれば気が済むのよ！

「…やっと来たか、まぁ１枚しか入ってないしな…ここで『マジカル・コンダクター』の効果発動！魔力カウンターを３つ取り除いて、手札からチューナーモンスター、『氷結界の風水師』を特殊召喚する」

氷結界の風水師　ＤＥＦ１２００

マジカル・コンダクター　ＭＣ・８→５

「チューナー…来るわね！シンクロ召喚が！？けど、『サイバー・ブレイダー』の効果発動！相手のモンスターが３体のとき、相手の魔法・罠・モンスターの効果は無効になる！ただし攻撃力は元に戻るわ…」

「ということは凰雅の場の魔力カウンターも無効になる…」

サイバー・ブレイダー　ＡＴＫ４２００→２１００

マジカル・コンダクター　ＭＣ・５→０

エンデュミオン　ＭＣ・２→０

「全然問題ないな…この効果を見越して粗方魔力カウンターを使ったんだし…俺はレベル４の『王立魔法図書館』にレベル３の『氷結界の風水師』をチューニング！」

ＬＶ３＋ＬＶ４＝ＬＶ７

少し派手な服装の女性のモンスターが３つの光の輪になって、大きすぎる図書館を包んでいく…

「星と星が集う時、魔導の英知が舞い降りる。光指す道となれ！シンクロ召喚！」

すると辺りが光に包まれた

「神秘を魅せよ！『アーカナイト・マジシャン』！」

光の中から出てきたのは白い法衣を着て手に宝石のついた杖を持った女性の魔法使いだった

アーカナイト・マジシャン　ＡＴＫ４００

？攻撃力４００？

「凰雅、そのモンスター攻撃力低くないか？」

十代がそのモンスターを指さしながら凰雅に聞いた

「慌てるなよ、十代。『アーカナイト・マジシャン』はシンクロ召喚に成功した時、このモンスターに魔力カウンターを２つ乗せる。アーカナイトの攻撃力はこのカードに乗っている魔力カウンター１つにつき１０００ポイントアップする！」

アーカナイト・マジシャン　ＭＣ・０→２　ＡＴＫ４００→２４００

「サイバー・ブレイダーは俺の場のモンスターが２体に減ったこと

で効果無効の効果は消え、攻撃力は倍になる」

サイバー・ブレイダー　ＡＴＫ２１００→４２００

「くぅ…」

完全にこっちのモンスターの効果と対処法を知ってるわね、凰雅は……

けど攻撃力は圧倒的にこっちが上よ、どうする気かしら…

「さらに『アーカナイト・マジシャン』の効果発動！フィールドの魔力カウンターを１つ取り除くことでフィールド上のカードを１枚破壊する。俺は『アーカナイト・マジシャン』のカウンターを１つ取り除いて明日香の『サイバー・ブレイダー』を破壊！もう１つ取り除いて明日香の左の伏せカードを破壊する！」

アーカナイト・マジシャン　ＭＣ・２→１→０　ＡＴＫ２４００→１４００→４００

凰雅のアーカナイト・マジシャンの杖から光が出てきて私のサイバー・ブレイダーと伏せカードを破壊した

破壊された伏せカードは『ドゥーブルパッセ』…残ってもサイバー・

ブレイダーが破壊されたあとじゃあっても意味がない…でも、サイバー・ブレイダーを破壊されたのは痛いわ…

「でも、おかげでそのモンスターの攻撃力一気に下がったわ！どうするつもり！？凰雅！」

「慌てるなって、俺はまだこのターン通常召喚をしていない。俺は『魔導騎士ディフェンダー』を召喚！」

すると凰雅の場に大きな盾を構えた法衣を着た魔法使いのモンスターが現れた

魔導騎士ディフェンダー　ＡＴＫ１６００

「ディフェンダーは召喚に成功した時、このモンスターに魔力カウンターを１つ乗せる。」

魔導騎士ディフェンダー　ＭＣ・０→１

「バトル！『アーカナイト・マジシャン』で明日香にダイレクトアタック！」

「罠発動！『炸裂装甲（リアクティブアーマー）』！『アーカナイト・マジシャン』を破壊するわ！」

攻撃力は低くてもあのモンスターの効果は危険すぎる！

「『魔導騎士ディフェンダー』の効果発動！フィールド上の魔力カウンターを１つ取り除くことで魔法使い族モンスター１体の破壊を免れる！」

「そんな！？」

明日香　ＬＰ４０００→３６００

「さらにディフェンダーとコンダクターで追撃のダイレクトアタック！」

「うぅ！！」

明日香　ＬＰ３６００→２０００→３００

「カードを１枚伏せてターンエンド…」

凰雅　ＬＰ３７００　手札３枚

モンスター　アーカナイト・マジシャン（魔力カウンター０個）
魔導騎士ディフェンダー（魔力カウンター０個）

魔法・罠　魔法都市エンデュミオン（魔力カウンター０個）　リサイクル　セット２枚（うち１枚くず鉄のかかし）

「私のターン、ドロー！」

けど、どうしましょうこの状況…はっきりいって不利も良い所なんだけど…

「私は『サイバー・チュチュ』を召喚！」

サイバー・チュチュ　ＡＴＫ１０００

「さらに手札から速攻魔法『プリマの光』を発動！自分の『サイバー・チュチュ』を生贄に手札から『サイバー・プリマ』を特殊召喚！」

サイバー・プリマ　ＡＴＫ２３００

「サイバープリマの効果発動！このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、フィールド上の魔法カードをすべて破壊するわ！」

「その効果の前にチェーンが乗りエンデュミオンと『マジカル・コンダクター』に魔力カウンターが乗る」

マジカル・コンダクター　ＭＣ・０→２

エンデュミオン　ＭＣ・０→１

「そんなの関係ないわ！」

「残念ながら関係ある。『魔法都市エンデュミオン』の効果発動、このカードが破壊される時、このカードに乗っている魔力カウンターを１つ取り除くことで、このカードの破壊を免れる」

「そんな！？」

結局破壊できたのは『リサイクル』だけ！？

エンデュミオン　ＭＣ・１→０

「……ターンエンドよ…」

明日香　ＬＰ３００　手札０枚

モンスター　サイバープリマ

魔法・罠　なし

「俺のターン、ドロー！」

凰雅のモンスターの攻撃力なら私のモンスターは倒せない…けどモンスター効果であっさり破壊されるわよね…

「俺は手札から『ミラクルシンクロフュージョン』を発動！」

「「「『ミラクルシンクロフュージョン』？？」」」

また知らないカード…今度はどんな反則効果なのよ？

「このカードはフィールド・墓地から融合に必要なモンスターをゲームから除外してシンクロモンスターを融合素材とする融合モンスターを融合召喚扱いで特殊召喚するカードだ。十代の『ミラクルフ

ュージョン』と同じようなカードだ」

シンクロモンスターを素材にする融合モンスターなんているの！？

「俺は場の『アーカナイト・マジシャン』と墓地の『氷結界の風水師』をゲームから除外して現れろ！『覇魔導師アーカナイト・マジシャン』！」

覇魔導師アーカナイト・マジシャン　ＡＴＫ１４００

凰雅の場に現れたのは蒼くて威圧感を感じるようなデザインの法衣を着たアーカナイト・マジシャンのようね…

「『覇魔導師アーカナイト・マジシャン』は融合召喚に成功した時、このカードに２つ魔力カウンターを乗せる。このカードの攻撃力は魔力カウンター１つにつき１０００ポイントアップ！さらに魔法を使ったから『マジカル・コンダクター』とエンデュミオンに魔力カウンターが乗る」

覇魔導師アーカナイト・マジシャン　ＭＣ・０→２　ＡＴＫ１４００→３４００

マジカル・コンダクター　ＭＣ・２→４

エンデュミオン　ＭＣ・０→１

「攻撃力３４００ですって！？」

なんでわざわざこんなモンスターを出すのよ！？

「そして『マジカル・コンダクター』の効果発動、このカードから２つ魔力カウンターを取り除き、墓地からチューナーモンスター『ナイトエンド・ソーサラー』を特殊召喚！」

ナイトエンド・ソーサラー　ＡＴＫ１３００

マジカル・コンダクター　ＭＣ・４→２

「またチューナー！？」

何なの？オーバーキルでもする気なの凰雅は！？

「『ナイトエンド・ソーサラー』のモンスター効果、このカードの特殊召喚に成功した時、相手の墓地から２枚カードを除外する。おれは明日香の墓地から『サイバー・ブレイダー』と『融合』を除外、そして、レベル４の『魔導騎士ディフェンダー』にレベル２の『ナイトエンド・ソーサラー』をチューニング！」

再びモンスターの1体が光の輪になってもう1体のモンスターが輪をくぐる

「集いし魔導が、荒らぶる嵐を呼び起こす！光さす道となれ！シンクロ召喚！」３

「出でよ！『マジックテンペスター』！」

現れたのは半透明の刃の鎌を持った女性のモンスターだった

マジックテンペスター　ＡＴＫ２２００

「『マジックテンペスター』のシンクロ召喚に成功したとき、このカードに魔力カウンターを１つ乗せる！そして手札から『強欲な壺』を発動！デッキからカードを２枚ドロー、そして、『マジックテンペスター』効果発動！１ターンに１度、自分の手札を任意の枚数墓地へ送る事で、その枚数分だけ魔力カウンターを自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターに置く…俺は手札４枚全てを墓地に送り、『覇魔導師アーカナイト・マジシャン』に４つカウンターを乗せる。さらに魔法カードを使ったことで『マジカル・コンダクター』と『魔法都市エンデュミオン』に魔力カウンターが乗る」

覇魔導師アーカナイト・マジシャン　ＭＣ・２→６　ＡＴＫ３４００→７４００

マジカル・コンダクター　ＭＣ２→４

エンデュミオン　ＭＣ１→２

「は、はは……」

私は笑うしかなかった…攻撃力７０００越えって…これが、凰雅の本気のデッキ……十代たちも凰雅のモンスターの攻撃力に言葉を失っているようね…

「行くぞ明日香！『覇魔導師アーカナイト・マジシャン』で『サイバー・プリマ』を攻撃！『恋符・マスタースパーク』！」

「また東方ネタっすか！？」

丸藤君がなにか言ってるけど私には何を言っているのかわからなかった

分かるのは目の前に迫る眩いばかりの光の奔流だけだった…

ぴちゅ～ん！

なぜかいつもとは違う気の抜けた破壊音でモンスターは破壊され、
そのまま光は私へ向かってきた

「きゃあああああああ！！」

明日香　ＬＰ３００→－４８００

こうして私と凰雅の決闘は凰雅の圧勝で幕を閉じた

ターン8・・・『これが凰雅のガチデッキってやつ？』（後書き）

マナ「みなさんこんにちわ♪」

マハード「みなさんこんにちわ」

マナ「今回は魔法使いデッキの話だったので私たちがあとがきを担当します」

マハード「まずは感想のお礼からいかせていただきます」

マナ「遊戯王様、感想ありがとう♪」

マハード「一同を代表してお礼を申し上げます」

マナ「この後今回の決闘の開設がありますのでここではこれで一回区切りますね」

マハード「すぐに8，5話がありますので詳しいことはそちらで…」

マナ「それではみなさん！8，5話で会いましょう♪」

8，5ターン・・・「解説ってやつ？」

蒼影「どうも、みなさん。今回も今回のデッキの紹介と決闘の簡単な解説を始めたいと思います。司会はいつもの通り、私、蒼影が務めさせていただきます。そして、今回のゲストは魔法使いデッキと言う事で、マナに来ていただきました」

マナ「やっほ～こんにちわ♪マナで～す」

蒼影「ではまず、今回凰雅が使ったデッキのレシピを紹介します。レシピは以下の通りです」

上級

・神聖魔導王エンディミオン

・闇紅の魔導師

・魔法の操り人形

下級

・マジカル・コンダクター×2

・クルセイダー・オブ・エンデュミオン×2
・王立魔法図書館×2
・魔導戦士ブレイカー
・魔導騎士ディフェンダー×2
・水晶の占い師×2
・ナイトエンド・ソーサラー×2
・氷結界の風水師
・エフェクト・ヴェーラー
・見習い魔術師×3

魔法

・魔法都市エンデュミオン×3
・魔力掌握×3
・リサイクル
・魔法石の採掘×2
・手札抹殺

・封印の黄金櫃×2
・テラ・フォーミング×2
・強欲な壺
・天使の施し
・ツイスター×2
・サイクロン
・ディメンション・マジック×2
・貪欲な壺×2
・ミラクルシンクロフュージョン

罠

・次元幽閉×2
・マジシャンズ・サークル×2
・対抗魔術
・神の恵み
・神の宣告

・隠された魔法書
・奈落の落とし穴×２
計５５枚

エクストラ
・アーカナイト・マジシャン×３
・マジックテンペスター×３
・エクスプローシブ・マジシャン×３
・ＴＧハイパー・ライブラリアン×２
・フォーミュラ・シンクロン×２
・覇魔導師アーカナイト・マジシャン×２
計１５枚

蒼影「となっております」

マナ「今までで一番デッキの枚数が多いね…手札事故がおきちゃうんじゃない？」

蒼影「そうだね、大体事故率は１０回中３～２回、でもドローカードが多めに入っているから何とかなるものだよ現実では強欲な壺と天使の施しが禁止だから、それと罠カードを２～３枚抜いてデッキの枚数を減らした方が回るよ」

マナ「では今回の決闘の簡単な解説をしていきたいと思いま～す！」

凰雅「今回の対戦相手は天上院明日香。アニメの中で結構オリカを使っているキャラなので、書くのに苦労するキャラです。」

マナ「今回使ったアニメオリジナルのカードは『ドゥーブルパッセ』、『プリマの光』だっけ？」

蒼影「『ドゥーブルパッセ』は相手のモンスターが自分のモンスターを攻撃してきた時、相手の攻撃してきたモンスターと自分の攻撃対象になったモンスターをそれぞれダイレクトアタックに強制的に変更するカードだな、『プリマの光』は自分フィールドの『サイバー・チュチュ』をリリースすることで手札から『サイバー・プリマ』を特殊召喚するカードだ。前者の『ドゥーブルパッセ』不発だったけどね…ちなみに『サイバー・プリマ』もＯＣＧ版ではなく、アニメ版の仕様になってます。ＯＣＧとの違いはＯＣＧ版はアトバンス召喚成功時のみ、フィールドの表側表示の魔法カードを破壊するのに対し、アニメ版は『プリマの光』に対応するように召喚・特殊召喚時にフィールド上の表側の魔法を破壊する効果になっています」

マナ「へ～～今回凰雅は十代との決闘の時と同じように『リサイクル』を使っていたね？」

蒼影「『魔力掌握』と『リサイクル』は相性が非常に良いです。今回はあまり目立ちませんがこのコンボで『王立魔法図書館』にカウンターをため、カードを大量にドローすることができます。これに『神の恵み』が発動していれば、ドローフェイズのドローも含めて最低でも『リサイクル』３回分のライフも回復できます。『クルセイダー・オブ・エンデュミオン』が居れば毎ターン確実に図書館の効果も使えるしね」

マナ「今回は壺と施しで強引にドローしてたけどね…それとアーカナイトってあんなに攻撃力上がるの？」

蒼影「上がります。アーカナイトとテンペスターが並ぶ頃には大量ドローも安定してきて手札が大量に余っている状態になりがちです。なので運がいい時はアーカナイトに１０個近くカウンターを乗せる事が出来たりしてあっという間に攻撃力１００００越えなんてのもざらです」

マナ「怖いね～そう言えば、決闘中、まだ魔力カウンターが残ってるときに『サイバー・ブレイダー』の効果を変えて魔力カウンターを０にした所があったけど、あれはいいの？」

蒼影「問題ないです。『魔法都市エンデュミオン』も『マジカル・コンダクター』も効果を使ったあとなので全然問題ありません。そこで魔力カウンターを惜しむより、凰雅がやったようにアーカナイトを出して、『サイバー・ブレイダー』を破壊した方がお得です」

マナ「ふ～ん…最後、凰雅のあれはネタ？」

蒼影「ネタですね…そろそろタグに『東方』を入れた方がいい気がしてきた…」

マナ「今回はこれくらいかな？次回はどうなるの？」

蒼影「…とりあえず、決闘後の会話だな…後は決まってないので追々考えます」

マナ「この小説では皆さんからの感想、ご指摘、精霊のアイデアを募集しています！」

蒼影「さらにこういうデッキを使ってほしいなどの意見も募集しています。興味を持った方は遠慮なく感想に書いてください」

マナ「それではみなさん、なにかいい事あったらいいね♪お相手は

ブラックマジシャンガールのマナと…」

蒼影「作者の蒼影でした」

ターン?…じゃないターン9・・・これが再会ってやつ?（前書き）

蒼影「ようやく更新…」

凰雅「何故遅れた?」

蒼影「理由はあとがきで話す…それではどうぞ」

ターン？…じゃないターン９・・・これが再会ってやつ？

～凰雅ｓｉｄｅ～

明日香との決闘を終え、野次馬も帰って行った

「まさか、オーバーキルされるなんて思わなかったわ…」

「ここ最近オーバーキルしてなかったからな…いいストレス解消になった」

「私でストレスを発散しないで！？」

「夜中に俺を呼び出しておいて何を言う？」

「私は十代を呼び出したのよ！」

「ま、まぁ二人とも…落ち着いて」

「「やかましい（わ）！！」」

「……はい（泣）」

三沢が地面にうずくまってしまったので俺と明日香は口論を止めた

「あぁ、悪い三沢」

「いいんだ、気にしないでくれ……」

俺は三沢に声かけるが、未だに三沢はテンションが低い

「ね、ねぇ凰雅！良かったらでいいのだけれど…私のデッキ見てくれないかしら？」

この空気に耐えかねた明日香が話題を変えるために俺にデッキ診断を申し出た

「良いのか？俺がデッキを見ても？」

「構わないわ、まだ3回しか凰雅の決闘を見ていないけど、少なくともいい加減なデッキの組み方はしていなかったわ…悔しいけど」

「わかった…けど今度にしてくれないか？正直眠い。まさか連続で決闘は精神的にきつい…三沢も悪いけどシンクロ云々についての説明も今度でいいか？」

「わかった」

俺はその後すぐ自分の部屋に戻った

・・・・・・・・

・・・・

・・

・

～明日香ｓｉｄｅ～

「まさか、明日香さんが負けるなんて思っても見ませんでしたわ…」

凰雅が帰った後、ももえが私に声をかけてきた

「全くよ！きっとあいつ、イカサマしたに決まってるわ！」

ジュンコはそう言っているが、凰雅のあれはイカサマではなかったわ…

反則みたいな効果のカードが多かったけど…

「ジュンコ、凰雅はイカサマなんかしていないわ…言いがかりはやめなさい」

「うぅ…」

ジュンコは悔しそうね…そんなに凰雅のことが気に入らないの？

「あ！ここにいた～！」

突然私は声をかけられた

声の方を向くと見知った子だった

「あら、どうしたの？あなたがレッド寮に来るなんて」

「だって、幼馴染の居場所がわかったんだよ、来ないわけがないじゃない！明日香もひどいよ！昨日女子寮に来たって

いうじゃない！？」

その子は矢継ぎ早に私に言ってくる

相変わらずね…

「で？どこ行ったの？私の幼馴染は…」

「ついさっき自分の部屋に戻っていたわ」

「え～～！？そうなの！？こうしちゃいられないわ！じゃあね！明日香！」

そう言うな否やその子はレッド寮へ走って行った

「待っててね～凰雅～～！！」

・・・・・・・・

・・・・・
・・
・

～凰雅ｓｉｄｅ～

部屋に帰るとカオスだった

「あ！お兄ちゃん！ねぇ、この人だれ？」

帰ってきて早々、メイがとある人物を指さして俺にそう聞いた

そこにいたのは白い法衣を着た女性…アーカナイト・マジシャンだった

「……何でいる？」

俺はアーカナイトマジシャンに声をかけた

「あ、どうも～アーカナイトマジシャンのサレスです。よろしくお願いします～」

「はぁ…どうも…」

なんというかものすごくマイペースな感じの人だった

まぁ、真面目そうな感じがするし、マハードと同じくストッパー役になってくれると俺個人としてはうれしいな…（俺の気苦労も減るし…）

と思っていると……

ドンドン！ドンドン！

突然ドアが連打された

「？だれだ？」

ドアが叩かれる音を聞いて精霊のみんなは姿を消した

俺はいつまでも連打されているドアを開けた

「や！久しぶりね！凰雅！！」

ドアの前に立っていたのは方より少し伸ばした黒い髪をポニーテールにした女の子だった

「……何でここにいるんだ？」

「私もデュエリストよ？アカデミアにいても不思議じゃないじゃない…それより久々にあった幼馴染に何か言うことは無いの？」

そいつは腰に手を当て、いかにも怒っています的な顔でそう言ってきた

「はぁ～…久しぶりだな、早乙女リン……」

俺は幼馴染のリンにそう言った

ターン？…じゃないターン９・・・これが再会ってやつ？（後書き）

蒼影「いかがだったでしょうか？」

凰雅「短い」

蒼影「一言で終わったｏｒｚ」

メイ「よしよし」

凰雅「小さな女の子に慰められる作者……警察に電話してもいいか？」

蒼影「俺何も悪いことしてないよ！？」

メイ「感想のお礼だよ！竜王＆竜姫さま！この世全ての悪さま！感想ありがとう！」

凰雅「で？遅れた理由は？」

蒼影「アーカナイトマジシャンことサレスと最後に出てきた早乙女リンのことだよ」

凰雅「早乙女…ということは…」

蒼影「早乙女レイの姉になります」

メイ「サレスについて困った事って何？」

蒼影「マスパ撃ったから魔理沙でいくかと思っていたんだけど、峠
陸哉さまからサレスのアイデアを貰っていたからどっちで行こうか悩んでいたんだよね」

凰雅「結局、アイデアの方を採用したと？」

蒼影「魔理沙を期待していた方ごめんなさい」

メイ「ここでいつものお知らせだよ！みんなにお兄ちゃんの元に来る精霊を募集…この作品の感想のところに応募する精霊のなまえ、マナお姉ちゃんやマハードさんのようにカード名ではない名前（↑これはお好みで）、性格を書いて送って来てね……待ってま～す」

凰雅「それでは…何かいいことあったらいいな…お相手は凰雅と」

蒼影「蒼影と…」

メイ「めいでした～～！」

ターン10・・・幼馴染と再会って奴？（前書き）

蒼影「ようやく出来たぜ！」

凰雅「遅かったな…そのうえ短いな」

蒼影「サーセン」

凰雅「ふざけてると焼き土下座な？」

蒼影「すみません私が悪かったです。私はノロマなブタ野郎です」

凰雅「こんな作者は放って置いて、それではどうぞ」

ターン10・・・幼馴染と再会って奴？

～凰雅ｓｉｄｅ～

早乙女リン…原作キャラ、早乙女レイの姉。

本来レイには姉は存在しない、しかし、俺がこの世界に来た影響かこうしてリンがいる

しかも、俺の影響はそれだけに留まらず、なんと如月家と早乙女家がお隣同士だった

おかげで俺とリン、そしてレイは幼馴染として過ごしてきたのだ

「ひっど～～い！せっかく再開した幼馴染をフルネームなの！？」

俺がリンをフルネームで呼ぶとリンは頬を膨らませ、俺に近寄ってきた

「悪かったよ、リン…久しぶりだな」

「うん！久しぶり！凰雅！」

そう言ってリンは満面の笑顔で俺に抱きついてきた

昔からこいつはよく俺に抱きついてくる…本人曰く癖だそうだ

「というか抱き着くな」

「いいじゃん！昔からやってることだし」

「ところで、何でリンはここへ来たんだ？」

「さっきも言ったけど、凰雅に会いに来たんだよ！半年くらい前に突然いなくなって！まさか特別推薦状のためにあっちこっちのデュエル大会に出ていたなんて知らなかったよ！何で言ってくれなかったの！？」

リンの言うと通り、俺はアカデミアの校長から特別推薦状を貰う為に半年ほど前から全国各地のデュエル大会に出場していた

いや～アカデミアに向かう直前の宿泊先のホテルでいきなり大量のカードの入ったケースとユベルたちに会ったのは本当に驚いたよ…マジで…

しかし、俺はリンの言ったセリフに違和感を覚えた

「？俺のことは妹に説明するように言ったはずだが？」

「そうだったの！？あの子そんなこと全然言ってなかったよ！？」

「忘れてたんだろ？今更なことじゃん……」

俺がヤレヤレといった感じのポーズで言うと…

「だったら最初から私に直接言え！」

「サーセン」

リンに怒られました

・・・・・・・・

・・・・

・・

・

リンが髪の毛が逆立つのではないかと言わんばかりに怒っていたの

で落ち着くまで待つこと五分…

ようやくリンの機嫌が元に戻りました

「まったく…今度埋め合わせしてもらうからね！」

「わかったよ…レイは元気か？」

レイとはリンの妹で今小学5年生だ

因みに原作では『恋する乙女』のデッキを使っていたが、俺が関わったおかげでGXの世界ではレベルの高いガチデッキになってしまった…

小学校ではトップクラスの実力なはずだ…

ただ、小さいころからリンと一緒に面倒を見ていたからか、リンと一緒に抱きついてくる位まで懐かれてしまった…

まぁ…小学生だし、俺にとっては二人目の妹みたいな認識だから邪な気持ちなんて無いんだけど…

「凰雅がいなくなって2日位は泣いてたわよ？3日目からは元に戻ったけど…」

「多分なんだけどさ…うちの妹、レイには事情説明したんじゃないのか？」

「は？じゃあ何で私には説明ないのよ！？」

リンが驚いた顔で俺に詰め寄ってきた

「多分…妹がレイに説明→妹はレイがリンに説明するだろうと思ってリンには説明しなかった→レイは説明を聞いてテンションが上がってリンに説明することが頭から抜けた→いつの間にかレイも妹もリンに説明したと思い込んで改めて説明しなかった……てことじゃないのか？」

「なんでだろう…あの二人ならありえそうだわ」

妹もレイも稀に天然入るからなぁ……

「そういえば、うちの妹はどうだ？変わったことはあったか？」

「ゆまちゃん？そういえばデュエルアカデミアの試験に向けて勉強するって言ってたわ…よく考えれば凰雅が居ると知っていたから勉強していたのね…今思えば急に勉強を始めた理由がわかったわ……」

如月遊馬(きさらぎゆま)……俺の妹…見た目や性格は俺が前世でやっていた遊戯王のゲームで登場する宮田ゆまその人である

デッキもこの世界では使いが少ないE・HEROデッキ…当然俺の影響でかなりガチデッキになったが…

俺もガチ寄りのデッキじゃないと負ける……

「そうか…元気みたいだな…」

「そういえば凰雅」

俺が感慨に耽っているとリンが俺に話しかけてきた

「なんだ、リン」

「さっきからあそこで私たちを見てる女の子たちって…もしかして精霊?」

「は?」

リンが指さしたところをみるとレミリア達精霊幼女組(レミリア・メイ・クウリィ)がジィーとこ

っちを見ていた…

てか何でリン精霊見えんの？

「見えるも何も私にも精霊居るわよ？」

「心を読むな…っているの！？」

多分ここ最近で一番の驚きだよ！

「今度の月一試験のときに会わせてあげるよ」

月一試験…というかこの世界の月一試験は月の第三週目にやるんだよな…

「そうかい…」

「じゃね、凰雅♪」

リンは笑顔でそう言って部屋を出て行った……

月一試験…どのデッキで行こう…

そんなことを考えながら俺はリンが開けっ放しにしたドアを閉めた

ターン10・・・幼馴染と再会って奴？（後書き）

凰雅「一人だけ説明されてなかったリン涙目」

蒼影「名前しか出てこなかったけどオリキャラ？も出たね」

マハード「作者殿が出したのでは？」

凰雅「宮田ゆまって？」

凰雅「タッグフォース４くらいから出てくるオリキャラでＥ・ＨＥＲＯデッキを使う人、わかる人はわかる」

マハード「そうですか…それでは感想のお礼に入りましょう」

蒼影「アーカナイト・マジシャン／バスターを使うＣＯ２さま、ＧＭＳさま、感想ありがとうございます！」

凰雅「次回はどうするんだ？」

蒼影「月一試験の様子を描こうかと…」

マハード「使うデッキはどうなさるので？」

蒼影「シンクロを使うか使わないかで悩んでる」

凰雅「無しでいいんじゃないか？最近、シンクロ結構使ってるし」

蒼影「ま、有りでも無しでも対戦者涙目なんだけどね♪」

マハード「酷いですね…」

蒼影「デュエルとは非常なものなんだよ…ライロの天使デッキを使おうとした瞬間対戦者がＡ・Ｏ・Ｊデッキに代えてくるなんてざらだよ？」

凰雅「公式じゃ大戦直前にデッキ変えるの話だけどな？」

蒼影「俺、公式の大会でないし…」

マハード「ここでいつものお知らせです。皆様に凰雅殿の元に来る精霊を募集します。この作品の感想のところに応募する精霊の名前、マナや私のようにカード名ではない名前（↑これは個人の自由で構いません）、性格を書いて送って来てください……待ってます」

凰雅「それでは今回はこの辺で、何かいいことあったらいいよな？お相手は如月凰雅と…」

蒼影「作者の蒼影と…」

マハード「ブラックマジシャンのマハードでした」

ターン10，5・・・出番が欲しいって奴？（前書き）

蒼影「最近ユベルたちが空気だったので書きました」

ターン10，5・・・出番が欲しいって奴？

～凰雅ｓｉｄｅ～

「最近僕たちが空気になってきたと思うんだ…そう思わないかい？凰雅」

リンが帰ってから俺は机代わりの卓袱台に教科書とノートを広げ、月一テストへ向けての勉強を開始した

いま俺が開いているのは現代国語の教科書…

原作では特に描写されていなかったが、デュエルアカデミアにも普通の高校と同じように現国や数学などの普通科目が存在する

…錬金術など大学に行ったって存在しない科目も存在するが…ただ、アカデミアはデュエルモンスターズ関係に重きを置かれているので、内容のレベルはそこまで高くない…

で、いざ勉強を始めようとし時にユベルから声をかけられたのである

「何言ってるんだ？ユベル…」

「レミリアたちが来てから僕たちの出番が減ったのは周知の事実、

だからこうして凰雅に言ってるじゃないか」

「出番言うな…確かに…言われてみればそんな気がしないでもない」

俺がそんなことを言うとマナまでもがやってきて

「だよね！だからさぁ、出番頂戴！」

「だから、出番言うな。…具体的にはどうすんだよ？」

「私とお師匠様を入れたデッキか、ユベルを入れたデッキか、エリアちゃんを入れたデッキを今度の試験の実技に使ってほしい！」

なるほど…そういうことか…まぁ確かにユベルたちよりレミリアたちの方が最近目立っていたが…それにサレスもやってきたしなぁ…

「ちなみに…」

「ん？」

「凰雅は選ばなかった人の言うことを一つ聞いてもらうから♪」

とんでもないこと言いやがった…ということは、3人のうち選ばなかった2人の要望を聞かなきゃいけないってことだよな…

「待てコラ」

「マスタ…」

おお！エリア！お前は俺の味方だよな？そうだよな？

「マナかユベルを選んであげて…私はマスタにお願いを聞いてもらうだけでいい…」

俺に味方なんていなかった…

「……因みにお前らのお願いとやらを聞いておこうか？」

俺がそう聞くとマナがとってもいい笑顔で

「アップルパイとシフォンケェ～キ！！」

こいつが花より団子な性格でよかった…マジでよかった

「ユベルは？」

「僕とベットイ…」

「マハード、サレス。部屋にあるゲーム類全部実家に送るから箱詰め手伝って」

この馬鹿なんてこと言おうとしやがる！

「冗談です。やめてください」

見事な土下座だった…あいつ最近ゲームに嵌りすぎだろ…

「お前もマナと同じでいいな？」

「いや…僕は…」

「い・い・な？」

「はい！問題ありません！」

「よし…エリアは？」

残りはエリア…まぁエリアはいい子だからユベルみたいな無茶ぶりはしてこないだろう…

「んと…一緒に…お風呂…」

「お前たちはどうしてそういうのばっかりなんだ！？」

R指定がついたらどうする！？

「あ、お師匠様は何かあります？」

そこでマハードに振るのかよ……

「いえ、私は特に…強いて言うのなら最近包丁の切れ味が落ちてきているので砥石が欲しいです」

大人だ…大人がいる

「まぁ…どのデッキを使うかは考えておくから…」

そう言って俺は再び教科書と向き合った

ターン10，5・・・出番が欲しいって奴？（後書き）

凰雅「あいつら暴走しすぎだろ…」

サレス「みなさん元気ですねぇ～」

凰雅「サレスのその楽観さが羨ましいと思ってしまった…じゃあ、感想のお礼から」

サレス「毎日がダルい男さま感想ありがとうございますぅ～」

凰雅「月一試験は次回に回すそうです」

サレス「そうみたいですねぇ～凰雅さんはどのデッキを使うんですか？」

凰雅「ぶっちゃけどれでもいいと思ってる」

サレス「そうですかぁ～」

凰雅「じゃあ今回はこれくらいで」

サレス「じゃあ、何か良いことあったらいいですねぇ～？お相手はサレスと」

凰雅「凰雅でした」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9360p/

遊戯王ＧＸ　強制転生日記

2011年11月4日17時23分発行